平成 21･22 年度研究報告書

情緒障害児短期治療施設における性的問題への対応に関する研究（第１報）

研究代表者　滝川一廣（学習院大学）
共同研究者　平田美音（くすのき学園）
玉井邦夫（大正大学）
坂口繁治（坂口社会福祉士事務所）
平岡篤武（静岡県健康福祉部）
増沢高（子どもの虹情報研修センター）
奥山志麻（横浜いずみ学園）
大塚斉（武蔵野児童学園）
相澤林太郎（子どもの虹情報研修センター）
堀健一（あゆみの丘）

社会福祉法人 横浜博萌会
子どもの虹 情報研修センター
（日本虐待・思春期問題情報研修センター）

平成 21･22 年度研究報告書

情緒障害児短期治療施設における性的問題への対応に関する研究（第１報）

社会福祉法人 横浜博萌会
子どもの虹 情報研修センター
（日本虐待・思春期問題情報研修センター）

目次

Ⅰ　問題と目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ　結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

１．　基礎統計・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

２．　児童の示す「性的問題行動」・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

３．　児童の示す「その他の問題行動」・・・・・・・・・・・・・・・・17

４．　施設内の性的加害−被害の問題・・・・・・・・・・・・・・・・・29

５．　施設の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

Ⅳ　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

Ⅴ　文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

Ⅰ．問題と目的

児童福祉施設への被虐待児の入所の増加に伴い、施設内で児童が示す性的問題が、クローズアップされるようになっている。児童福祉施設における性的問題は、低学年児の性化行動、異性あるいは同性同士の性的加害と被害、性の倒錯的行動など多岐にわたり、対応には困難が伴うのが現状である。性的問題が起きた場合、被害児と加害児の分離（施設内分離、一時保護所の利用や他施設への措置変更）、施設に残った被害児または加害児への対応・治療、当該児童以外の児童への対応、職員のメンタルヘルスへの配慮・対応など多くの課題に直面する。施設で起きる性的問題は「予防」「早期発見と危機介入」「その後の治療・心理教育」など様々な側面からのアプローチを必要とし、対応する職員は現場で苦慮しているのが現状である。

児童福祉施設における性的問題に関しては、性的虐待に関する研究の一部として柳澤他(2009,2010,2011)が、また施設内虐待という文脈では星野(2009など)等があり、徐々に報告はなされてきてはいるものの、上記柳澤他(2009など)の対象は、性的虐待を受けた児童が中心であり、施設入所中で性的虐待の被害が特定されていない児童も含めた検討は一部行われているのみで、性的加害や被害も含む性化行動全体について、入所児童の状況や対応の現状等踏み込んだ研究はなされていない。

さて、施設内で起きる性的問題を考える場合、過去に性的被害を受けた児童のみならず、性的加害や被害につながるリスクを抱えた子どもも念頭におく必要がある。したがって、以下の点を把握し分析検討することが必要であり、以下の5点を本研究の目的とする。

① 性的加害被害のみならず、性化行動も含めた性的問題の実状を把握すること。
② 性的問題発生に関連すると思われるその他の問題も含めてその実情を把握すること。
③ 施設の構造や対応のあり方等取り組みの実態を把握すること。
④ 最も深刻である性的加害の実情と発生に至った背景を分析すること。

これらを踏まえた上で、

⑤ 深刻な性的問題の発生を予防するための手立て、問題が発生した場合の早期かつ適切な対応のあり方、性的問題を抱えた子どもへの治療的支援のありかたを見出すこと。

以上をふまえ、本研究では児童福祉施設の一つである全国37の情緒障害児短期治療施設をフィールドにして研究をおこなった。今回の報告はその第１報告（平成21・22年度研究報告書）として、①入所中の児童の性的問題の諸相、②関連するその他の問題の諸相、③性的加害被害の現状、④情緒障害児短期治療施設における性的問題に対する対応の在り方、の4点を柱に質問紙調査にてとらえた結果をまとめ、考察したものである。

なお第2報告（平成23年度研究報告書）では、性的加害の問題が多く発生した施設について、その事案の発生の背景と機序、その後の具体的な対応について、事例分析を通して検討し、性的問題の発生を予防するための手立て、問題が発生した場合の早期かつ適切な対応をあり方、性的問題を抱えた子どもへの治療的支援のありかたを中心に検討し報告する予定である。

Ⅱ．方法

全国の情緒障害児短期治療施設全 37 施設を対象に、質問紙調査を実施した。調査期間は平成 22 年 7 月から平成 23 年 2 月である。

質問紙調査で扱った項目は、本研究の平成21 年度研究会で話し合われた視点に基づき、Friedrich,W.N,(1991)のCSBI(Child Sexual Behavior Inventory)をベースにしながら質問項目を検討し、質問紙を作成した。

質問紙の構成は、①「性的問題行動」(22 項目)、②「その他の問題行動」(衝動性や支配性，社会性，親密さの課題等)(19 項目)、③過去 3 年間の性被害・加害状況（7 項目)、④施設の対応（20 項目）からなる（巻末資料参照）。①②については、小学生低学年、小学生高学年、中学生、高校生についてそれぞれ男女別で調査を行った。①②の項目を一覧にしたのが次ページ表 1 である。

①「性的問題行動」、②「その他の問題行動」については、施設に在籍する児童のうち、質問項目に該当する児童の実人数を記入するよう求めた。③については、過去3年間に性的問題を起こした児童の数、その対応、措置変更した児童の有無、その理由、またその後の対応について質問した。④については、研究会の中で性的問題の対応と防止に関して検討が必要と判断された日常生活上の事柄について質問した。施設の構造的な枠組みなどのハード面に関する項目、日常のルール、プログラム、性教育などの施設における性的問題に関わると思われる基本的な対応に関する質問項目である。また、「児童相談所に対する期待」という項目も設けている。③④については、「はい」「いいえ」「どちらでもない」の 3 件法での質問項目と、その具体的内容をきく自由記述の質問項目を作成した。

なお高校生年齢の児童については、施設によって在籍人数にばらつきがあるという理由により、今回は分析対象から除外した。

表１．質問紙項目（①、②）

①　性的問題行動	②　その他の問題行動
１．人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る	１．人との距離が適切でない
２．異性のような服装をする	２．同年齢の友人と遊べない
３．人前で性器を触ったり、マスターベーションする	３．相手の立場で感じたり考えたり出来ない
４．性器を描いたり、作ったりする	４．自己評価が低い
５．他人の性器やプライベートゾーンに触る	５．遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある
６．卑猥な言葉、性行為に関する声を出す	６．性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい
７．性器やプライベートゾーンを他人に見せる	７．人に対する支配性が強く、コントロールしようとする
８．性行為について話す	８．暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い
９．異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする	９．過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）
10．ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく	10．過去に非接触型性的虐待を受けている
11．性行為について、場をわきまえず、知りたがる	11．異性の靴を集めるなど性的倒錯行為をする
12．Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする	12．ボーっとすることがある、振り返りが出来ない（解離症状）
13．ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する	13．大人に適切に頼ることが出来ない
14．アダルトサイトやポルノ写真を所有する	14．自分の性を受け入れられない
15．施設内の児童（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	15．基本的な生活習慣が身についていない
16．施設外の児童（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	16．他者に従順で影響を受けやすい
17．施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	17．自傷がある
18．異性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する。	18．喫煙、万引き等の非行傾向がある
19．同性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する	19．職員に対する反抗、暴力がある
20．接触を伴わない性的な嫌がらせ・脅しをする	
21．性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする	
22．異性の居室へ侵入をする	

Ⅲ．結果

１．基礎統計

全37 施設から回答が得られた（有効回収率100%）。本節では、基礎データとして、施設の入所定員と現員、回答者の属性、施設形態などの情報についてまとめた。

（１）入所定員と現員

全37 施設の総定員数は 1478名で、平成22 年度 2月現在の総現員は1165名（男子675名、女子490名、入所率78.8%）であった。その内訳は、小学生男子305名（低学年87名・高学年218名）、小学生女子 210名（低学年57名・高学年153名）、中学生男子279名、中学生女子212名、高校生男子87名高校生女子65名、その他男子4名その他女子3名であった（在籍割合は図1参照）。全体的に、小学校高学年と中学生が多く在籍しおり、全体の74%を占めていた。

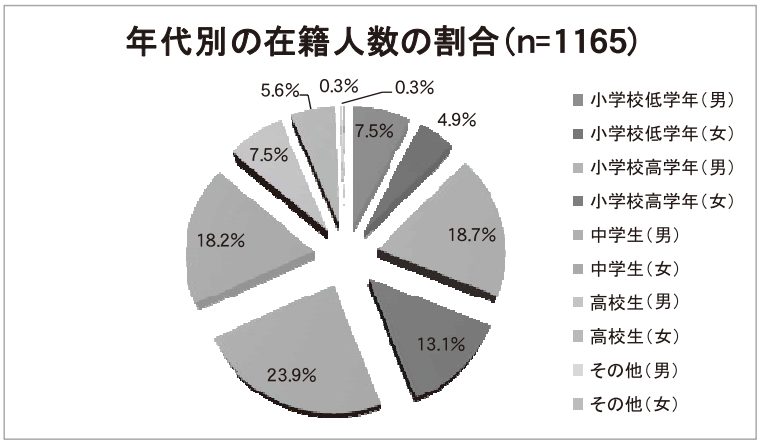


図１　年齢別の在籍人数の割合

（２）回答者の属性と人数

回答者	全45名
施設長・副施設長	4人
児童指導員	9人
セラピスト・心理職	28人
看護師	2人
事務・総務	2人

各施設の「施設内の性的問題、対応に詳しい職員」に回答を依頼した。複数名で回答している施設もあり、施設数とは一致しない。セラピスト・心理職からの回答が最も多かった。

（３）施設形態

大舎 ※	23
中舎	7
小舎	3

施設形態については、大舎制が最も多く 23 施設であった。

※一部ユニット制を取り入れている施設を含む（2 施設）。

２．児童の示す性的問題行動

本節では、施設で起きる「性的問題行動」について、該当する児童の実数、児童全体に占める割合を示し、統計的分析を行った結果を示す。各項目について、（１）では全入所児童に占める該当児童数の割合を示し、男女間の比較を行い、（２）では年代内の男女間比較、年代間比較を行った。年代、性別によって母数に差があることから、該当する児童の比率の関係を見るために SPSS ver. 19 を使用し、母比率の検定を行った。

（１）入所児童全体における人数と割合（小学生・中学生）

入所児童全体における項目別の人数、割合（表 2）、全体に占める性的問題を持つ児童の割合（図２)、男女別の割合（図３）を示した。また、表 3 は統計的検定の結果である。

全ての群で高頻度だった項目が「人にベタベタする，会話の際に相手の身体に触る」で全入所児童の 26%で認められた。その他、在籍児童全体のうち 10%以上を占める項目は、「卑猥な言葉、性行為に関する声をだす」(13%)、「他人の性器やプライベートゾーンに触る」(12%)、「異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする」(12%)、「TV や本での性描写を見て過度に反応する」(11%)、「ボランティアや実習生など知らない大人に抱きつく」(10%) であった。

表２．性的問題行動(Q1)の項目別の人数と割合

	Q1-1	Q1-2	Q1-3	Q1-4	Q1-5	Q1-6	Q1-7	Q1-8	Q1-9	Q1-10	Q1-11	Q1-12	Q1-13	Q1-14	Q1-15	Q1-16	Q1-17	Q1-18	Q1-19	Q1-20	Q1-21	Q1-22
小学校低学年　男子	23	1	1	2	23	20	9	7	6	16	2	4	9	0	3	0	0	4	7	0	0	0
(n=87)	26%	1%	1%	2%	26%	23%	10%	8%	7%	18%	2%	5%	10%	0%	3%	0%	0%	5%	8%	0%	0%	0%
小学校低学年　女子	23	1	1	0	10	6	3	0	8	20	1	3	9	0	5	0	0	1	2	0	0	0
(n=57)	40%	2%	2%	0%	18%	11%	5%	0%	14%	35%	2%	5%	16%	0%	9%	0%	0%	2%	4%	0%	0%	0%
小学校高学年　男子	55	0	5	7	35	49	16	18	22	23	19	25	28	4	26	2	0	10	12	2	2	0
(n=218)	25%	0%	2%	3%	16%	22%	7%	8%	10%	11%	9%	11%	13%	2%	12%	1%	0%	5%	6%	1%	1%	0%
小学校高学年　女子	54	6	10	6	14	20	12	9	28	24	8	13	20	2	13	0	2	12	9	2	0	0
(n=153)	35%	4%	7%	4%	9%	13%	8%	6%	18%	16%	5%	8%	13%	1%	8%	0%	1%	8%	6%	1%	0%	0%
中学生　男子	55	1	13	6	29	21	15	27	22	4	13	23	24	15	20	3	0	5	16	1	4	2
(n=279)	20%	0%	5%	2%	10%	8%	5%	10%	8%	1%	5%	8%	9%	5%	7%	1%	0%	2%	6%	0%	1%	1%
中学生　女子	47	11	2	2	14	17	6	23	34	13	11	6	24	1	22	7	2	5	7	0	0	3
(n=212)	22%	5%	1%	1%	7%	8%	3%	11%	16%	6%	5%	3%	11%	0%	10%	3%	1%	2%	3%	0%	0%	1%
合計	257	20	32	23	125	133	61	84	120	100	54	74	114	22	89	12	4	37	53	5	6	5
%	26%	2%	3%	2%	12%	13%	6%	8%	12%	10%	5%	7%	11%	2%	9%	1%	0%	4%	5%	0%	1%	0%

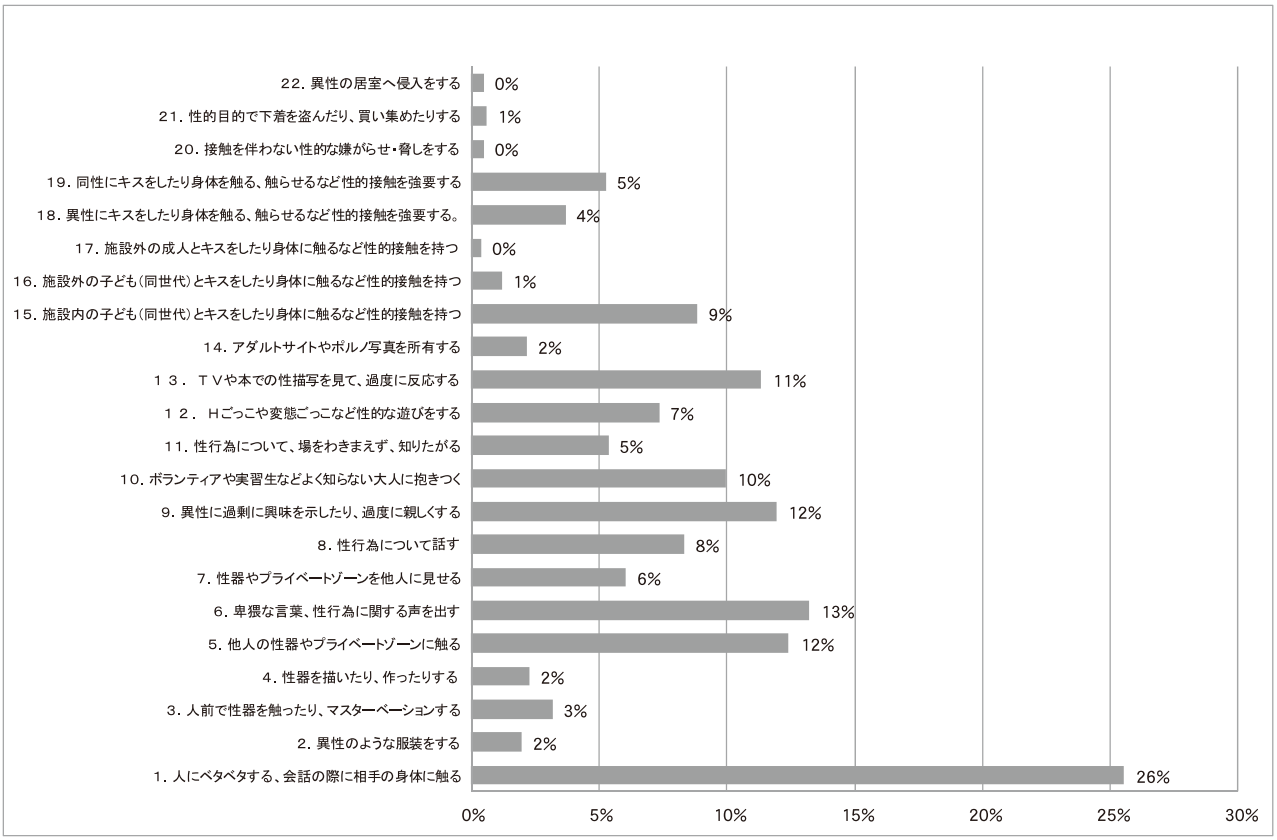


図２．全入所児童における性的問題の割合（n=1006）

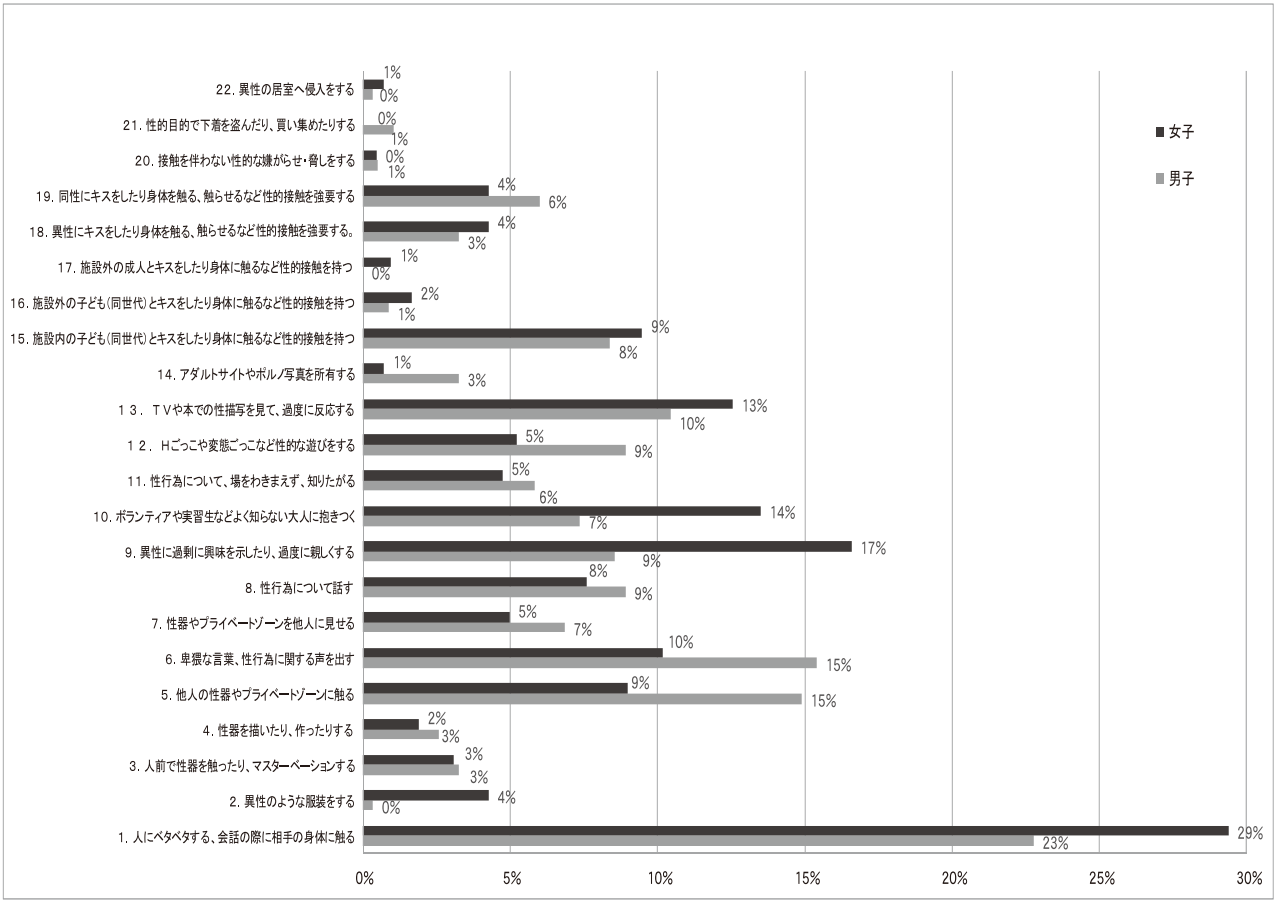


図３．全入所児童における性的問題の割合（男女別）（n=1006）

男女間で統計的有意差が認められた質問項目を以下に示す。男子に多いのは「他人の性器やプライベートゾーンに触る」「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」「Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする」「アダルトサイトやポルノ写真を所有する」「性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする」であり、女子に多いのは、「人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る」「異性のような服装をする」「異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする」「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく」「施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ」であった(表3参照)。ただし、項目によっては、人数の少ないものもあるので解釈は慎重に行う必要がある(以下同様)。

表３．小学生・中学生の性的問題の割合（%）の男女差

	男子 (n=584)	女子 (n=422)	*p*	
1　人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る	22.8%	29.4%	0.018	*
2　異性のような服装をする	0.3%	4.3%	0.000	**
3　人前で性器を触ったり、マスターベーションする	3.3%	3.1%		
4　性器を描いたり、作ったりする	2.6%	1.9%		
5　他人の性器やプライベートゾーンに触る	14.9%	9.0%	0.005	**
6　卑猥な言葉、性行為に関する声を出す	15.4%	10.2%	0.016	*
7　性器やプライベートゾーンを他人に見せる	6.9%	5.0%		
8　性行為について話す	8.9%	7.6%		
9　異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする	8.6%	16.6%	0.000	**
10　ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく	7.4%	13.5%	0.001	**
11　性行為について、場をわきまえず、知りたがる	5.8%	4.7%		
12　Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする	8.9%	5.2%	0.027	*
13　ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する	10.5%	12.6%		
14　アダルトサイトやポルノ写真を所有する	3.3%	0.7%	0.007	**
15　施設内の子ども（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	8.4%	9.5%		
16　施設外の子ども（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0.9%	1.7%		
17　施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0%	0.9%	0.018	*
18　異性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する。	3.2%	4.3%		
19　同性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する	6.0%	4.3%		
20　接触を伴わない性的な嫌がらせ・脅しをする	0.5%	0.5%		
21　性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする	1.0%	0%	0.037	*
22　異性の居室へ侵入をする	0.3%	0.7%		

*＜.05　**＜.01

（２）年代別、男女別の性的問題

（ア） 小学校低学年の性的問題（男女別）

小学校低学年にみられた性的問題行動について、割合を算出し男女別にグラフを作成した（図 4、5)。またその割合を男女間で比較するために図 6 を作成し、さらに母比率の検定を行った（表 4)。

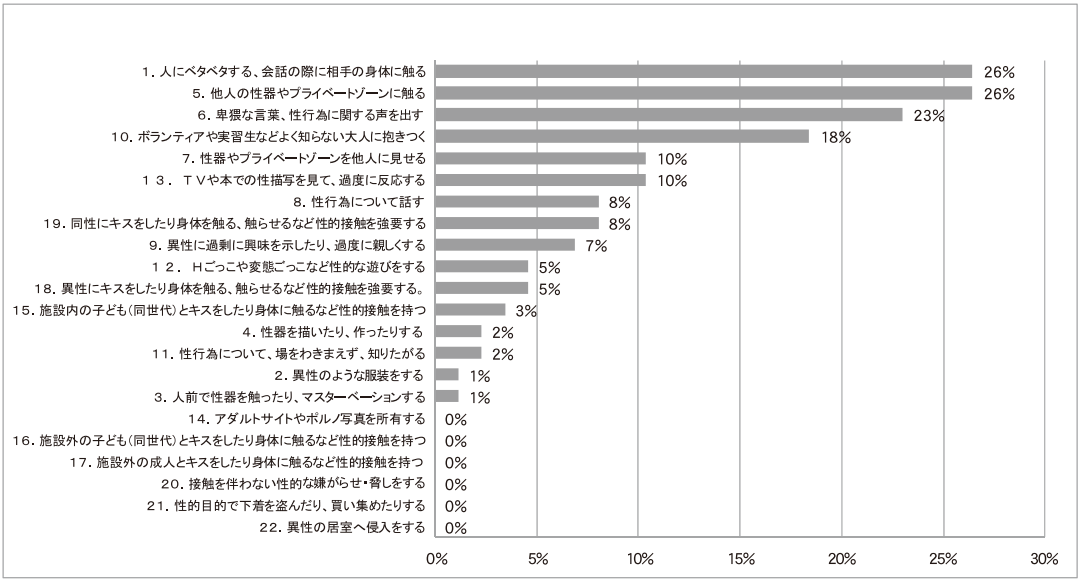


図４．小学校低学年男子の性的問題(n=87)

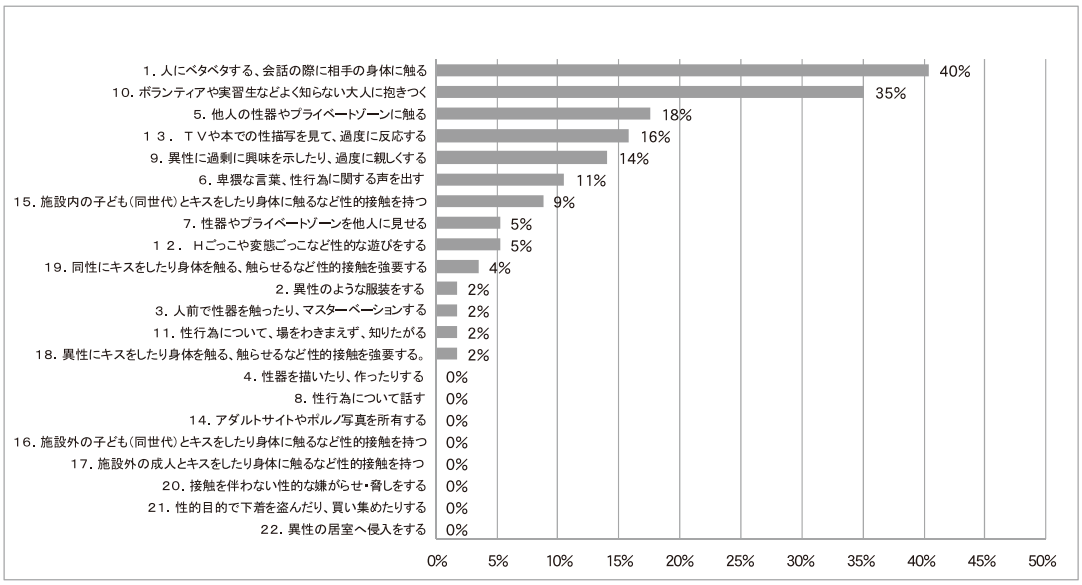


図５．小学校低学年女子の性的問題(n=57)

小学校低学年男子については、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」と「他人の性器やプライベートゾーンを触る」がともに多く（26%）認められ、続いて「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」(23%)、「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱き着く」(18%)であった。「性器やプライベートゾーンを他人に見せる」、「TVや本での性描写をみて過度に興奮する」も10%を示している。その他、同性、異性に対する性的接触の強要など悪質なものも認められる。

小学校低学年の女子については、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」が多く(40%)

「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱き着く」（35%）が続いた。次に「他人の性器やプライベートゾーンを触る」（18%）、「ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する」（16%）、「異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする」（14%）、「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」（11%）となっていた。

統計的検定においては、「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱き着く」が男子よりも女子に有意に多い傾向が示された。また、「性行為について話す」については男子のみに認められ、有意差が認められた。

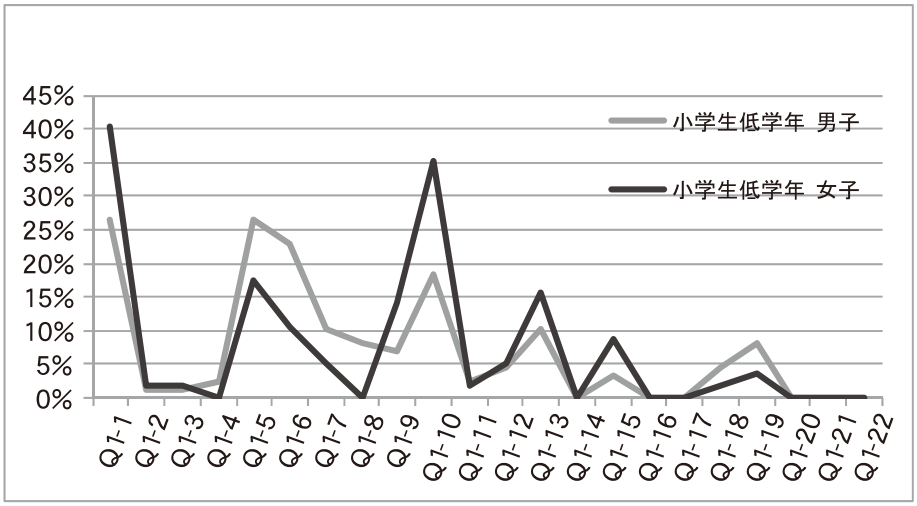


図６．小学生低学年の性的問題（男女別）

表４．小学校低学年の性的問題の割合（%）の男女差

			小学校　低学年			
			男（87）	女（57）	*p*	
性的問題（Q1）	1	人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る	26	40		
	2	異性のような服装をする	1	2		
	3	人前で性器を触ったり、マスターベーションする	1	2		
	4	性器を描いたり、作ったりする	2	0		
	5	他人の性器やプライベートゾーンに触る	26	18		
	6	卑猥な言葉、性行為に関する声を出す	23	11		
	7	性器やプライベートゾーンを他人に見せる	10	5		
	8	性行為について話す	8	0	0.028	*
	9	異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする	7	14		
	10	ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく	18	35	0.024	*
	11	性行為について、場をわきまえず、知りたがる	2	2		
	12	Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする	5	5		
	13	ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する	10	16		
	14	アダルトサイトやポルノ写真を所有する	0	0		
	15	施設内の子ども(同世代)とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	3	9		
	16	施設外の子ども(同世代)とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0	0		
	17	施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0	0		
	18	異性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する。	5	2		
	19	同性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する	8	4		
	20	接触を伴わない性的な嫌がらせ・脅しをする	0	0		
	21	性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする	0	0		
	22	異性の居室へ侵入をする	0	0		

*＜.05　**＜.01

（イ） 小学校高学年の性的問題

小学校高学年にみられた性的問題行動について、全体に占める割合を算出し、男女別にグラフを作成した（図 7、8）。またその割合を男女間で比較するために図 9 を作成し、さらに母比率の検定を行った（表 5）。

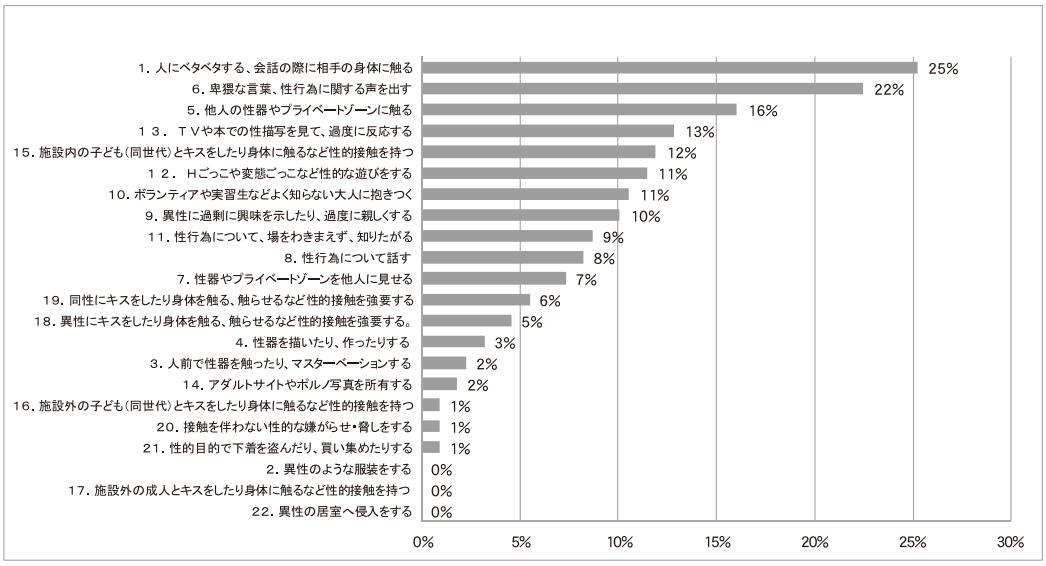


図７．小学校高学年男子の性的問題（n=218）

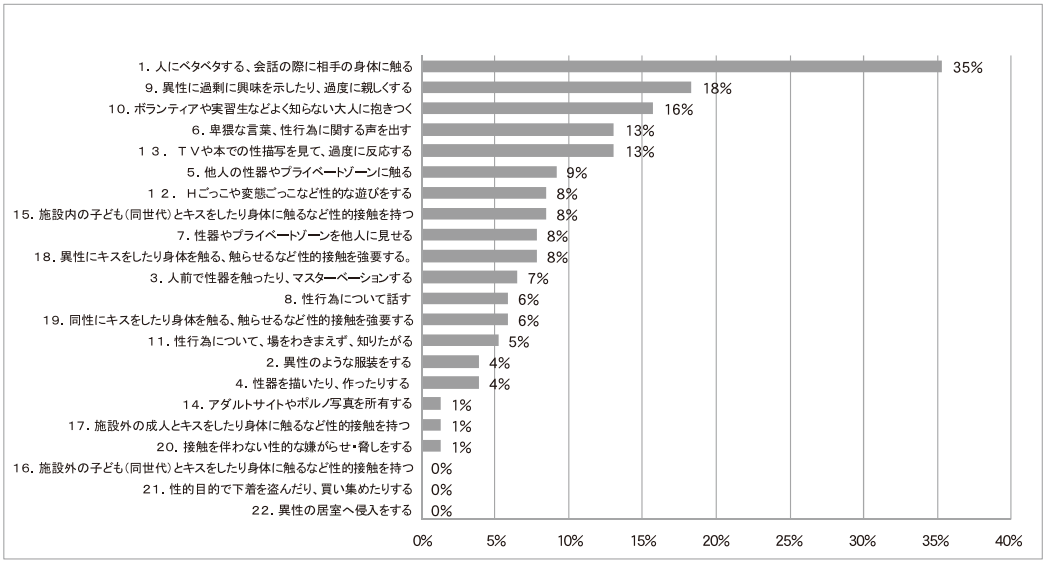


図８．小学校高学年女子の性的問題（n=153）

小学校高学年男子では、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」（25%）が高頻度で見られ、続いて「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」（22%）、「他人の性器やプライベートゾーンを触る」（16%）の人数が多い。「性描写への過度な反応」、「施設内で性的接触をもつ」、「H ごっこ」、「知らない大人に抱きつく」、「異性への過度な反応、親しくする」についても 10 % を超えている。性的接触の強要は「同性に対して」が 6%、「異性に対して」が 5%であった。

小学校高学年女子では、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」（35%）が最も高頻度でみられ、次いで「異性に過剰に興味を示したり、過剰に親しくする」（18%）、「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱き着く」（16%）と続く。卑猥な言動、性描写への過度な反応は 13%みられた。「他人のプライベートゾーンにさわる」が9%、「性的接触」「性的遊び」がそれぞれ8%であった。

性的な接触の強要については「異性に対して」が8%「同性に対して」が6%であった。その他性的な遊びなどの性化行動も認められる。

統計的検定において、「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」は女子よりも男子に、「人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る」「異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする」「人前で性器を触ったり、マスターベーションする」は女子に多い傾向が示された。「異性のような服装をする」は女子にのみ見られた（4%）。

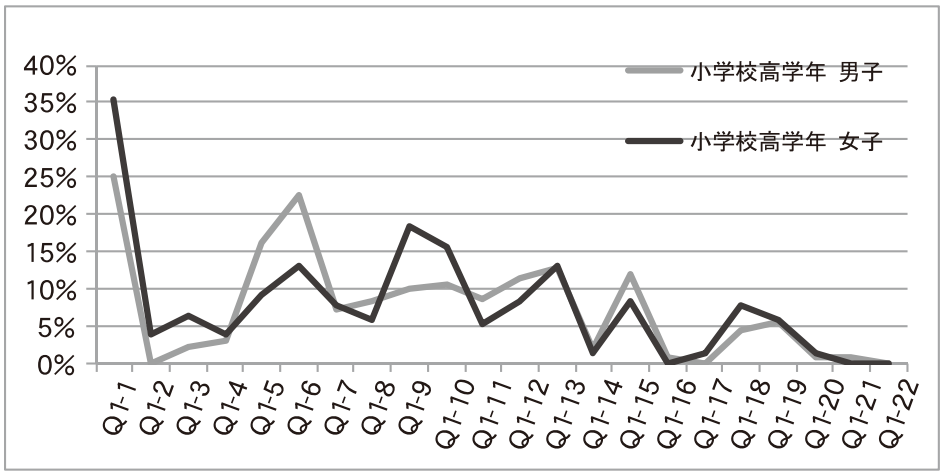


図９．小学生低学年男女の性的問題

表５．小学校高学年における性的問題の割合（%）の男女差

			小学校　高学年　男女			
			男（218）	女（153）	*p*	
性的問題（Q1）	1	人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る	25	35	0.036	*
	2	異性のような服装をする	0	4	0.003	**
	3	人前で性器を触ったり、マスターベーションする	2	7	0.041	*
	4	性器を描いたり、作ったりする	3	4		
	5	他人の性器やプライベートゾーンに触る	16	9		
	6	卑猥な言葉、性行為に関する声を出す	22	13	0.022	*
	7	性器やプライベートゾーンを他人に見せる	7	8		
	8	性行為について話す	8	6		
	9	異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする	10	18	0.023	*
	10	ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく	11	16		
	11	性行為について、場をわきまえず、知りたがる	9	5		
	12	Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする	11	8		
	13	ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する	13	13		
	14	アダルトサイトやポルノ写真を所有する	2	1		
	15	施設内の子ども(同世代)とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	12	8		
	16	施設外の子ども(同世代)とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	1	0		
	17	施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0	1		
	18	異性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する。	5	8		
	19	同性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する	6	6		
	20	接触を伴わない性的な嫌がらせ・脅しをする	1	1		
	21	性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする	1	0		
	22	異性の居室へ侵入をする	0	0		

*＜.05　**＜.01

（ウ）　中学生の性的問題

中学生にみられた性的問題行動について、割合を算出し男女別にグラフを作成した（図 10、11）。またその割合を男女間で比較するために図 12 を作成し、さらに母比率の検定を行った（表 6）。

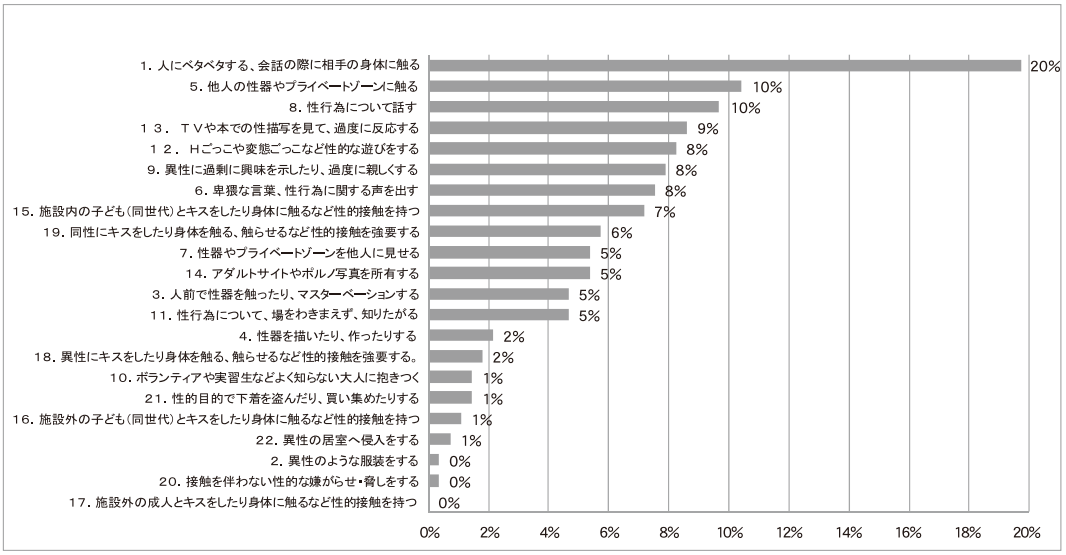


図１０．中学生男子における性的問題（n=279）

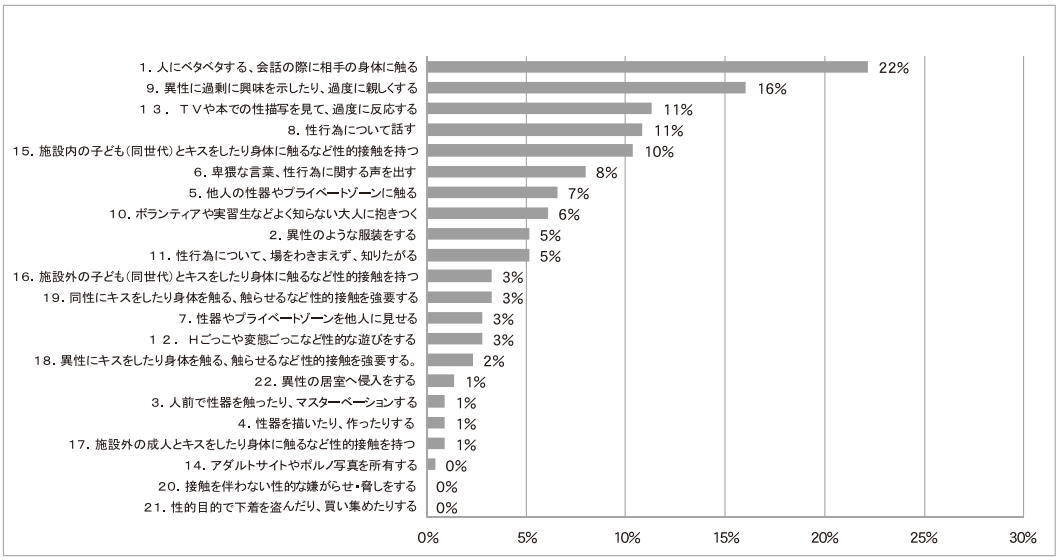


図１１．中学生女子における性的問題（n=212）

中学生男子では、「人にベタベタする、 会話の際に相手の体に触る」の人数（20%)が多く、「他人の性器やプライベートゾーンを触る」(10%)、「性行為について話す」(10%)と続くが 10%を超えているのはこの 3 項目のみである。「TV や本での性描写をみて過剰に反応する」(9%)、「H ごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする」(8%)、「異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする」(8%)、「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」(8%)、「施設内の同世代と性的接触をもつ」(7%) と続く。中学生男子では、他のこれまでの年代と比べ全般的に性的問題を示す人数が少なくなっている。「性的接触の強要」については「異性に対して」が2%、「同性に対して」は6%であった。

中学生女子では、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」の人数（22%)が多く、「異性に過剰に興味を示したり、過剰に親しくする」(16%)、「ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する」(11%)、「性行為について話す」(11%)、「施設内の児童（同世代)とキスをしたり身体に触るなどの

性的接触を持つ」（10%）がそれに続く。それ以外は10%を下回る。「性的接触の強要」は「異性に対して」が2%「同性に対して」は3%であった。

統計的検定においては、「異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする」「異性のような服装をする」は女子に、「人前で性器を触ったり、マスターベーションする」「Hごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする」「アダルトサイトやポルノ写真を所有する」などは男子に多い傾向が示された。「異性のような服装をする」については、女子にのみ見られ(5%)、「アダルトサイト、ポルノ所有」は男子のみで5%であった。

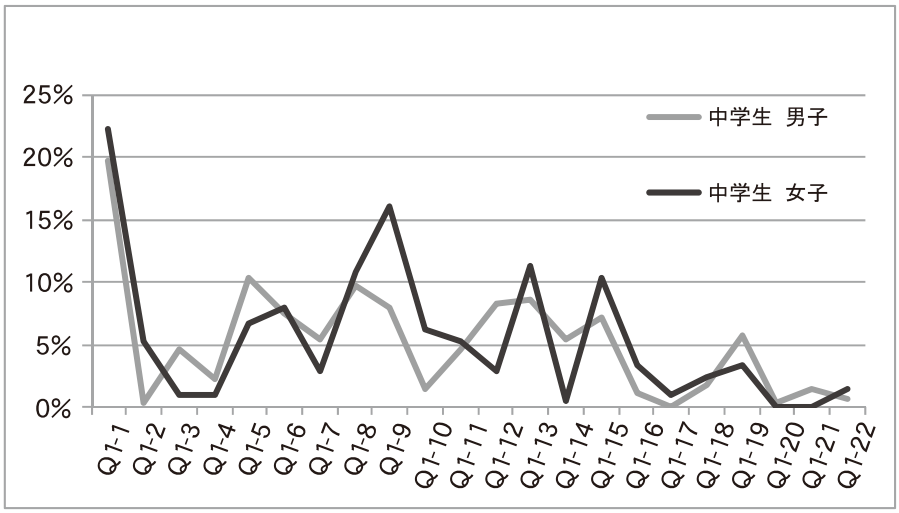


図１２．中学生男女の性的問題

表６．中学生の性的問題の割合（%）の男女差

			中学生　男女			
			男 (279)	女 (212)	*p*	
性的問題）Q1）	1	人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る	20	22		
	2	異性のような服装をする	0	5	0.001	**
	3	人前で性器を触ったり、マスターベーションする	5	1	0.018	*
	4	性器を描いたり、作ったりする	2	1		
	5	他人の性器やプライベートゾーンに触る	10	7		
	6	卑猥な言葉、性行為に関する声を出す	8	8		
	7	性器やプライベートゾーンを他人に見せる	5	3		
	8	性行為について話す	10	11		
	9	異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする	8	16	0.005	**
	10	ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく	1	6		
	11	性行為について、場をわきまえず、知りたがる	5	5		
	12	Hごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする	8	3	0.012	*
	13	ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する	9	11		
	14	アダルトサイトやポルノ写真を所有する	5	0	0.002	**
	15	施設内の子ども(同世代)とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	7	10		
	16	施設外の子ども(同世代)とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	1	3		
	17	施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0	1		
	18	異性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する。	2	2		
	19	同性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する	6	3		
	20	接触を伴わない性的な嫌がらせ・脅しをする	0	0		
	21	性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする	1	0		
	22	異性の居室へ侵入をする	1	1		

*＜.05　**＜.01

（エ） 性的問題の年代間の比較

性的問題について、男女別で年代差を検討するため、男子女子それぞれについて年代間の比率の検定を行った。小学校低学年、高学年、中学生の3群の性的問題がある児童の割合を図13、図14に示し、表7、表8に検定結果を示した。

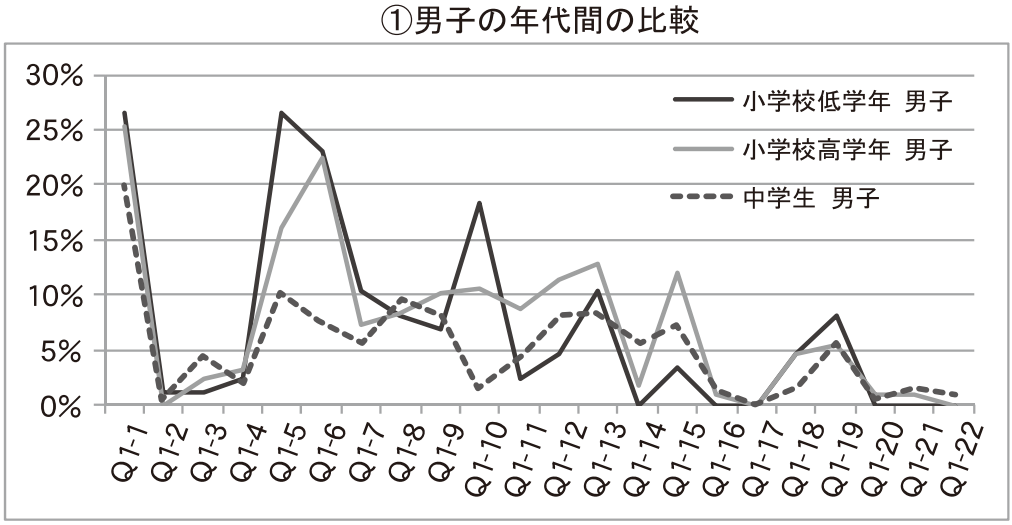


図１３．男子全年代の性的問題の割合

表７．男子の性的問題行動の割合（%）と年代間の統計的分析の結果

			男子											
			低学年-高学年				低学年-中学生				高学年-中学生			
			低学年	高学年	*p*		低学年	中学生	*p*		高学年	中学生	*p*	
性的問題（Q1）	1	人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る	26	25			26	20			25	20		
	2	異性のような服装をする	1	0			1	0			0	0		
	3	人前で性器を触ったり、マスターベーションする	1	2			1	5			2	5		
	4	性器を描いたり、作ったりする	2	3			2	2			3	2		
	5	他人の性器やプライベートゾーンに触る	26	16	0.037	*	26	10	0.000	**	16	10		
	6	卑猥な言葉、性行為に関する声を出す	23	22			23	8	0.000	**	22	8	0.000	**
	7	性器やプライベートゾーンを他人に見せる	10	7			10	5			7	5		
	8	性行為について話す	8	8			8	10			8	10		
	9	異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする	7	10			7	8			10	8		
	10	ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく	18	11			18	1	0.000	**	11	3	0.001	**
	11	性行為について、場をわきまえず、知りたがる	2	9	0.046	*	2	5			9	5		
	12	Hごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする	5	11			5	8			11	8		
	13	TVや本での性描写を見て、過度に反応する	10	13			10	9			13	9		
	14	アダルトサイトやポルノ写真を所有する	0	2			0	5			2	5	0.041	*
	15	施設内の子ども（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	3	12	0.024	*	3	7			12	7		
	16	施設外の子ども（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0	1			0	1			1	1		
	17	施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0	0			0	0			0	0		
	18	異性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する。	5	5			5	2			5	2		
	19	同性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する	8	6			8	6			6	6		
	20	接触を伴わない性的な嫌がらせ・脅しをする	0	1			0	0			1	0		
	21	性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする	0	1			0	1			1	1		
	22	異性の居室へ侵入をする	0	0			0	1			0	1		

*＜.05　**＜.01

小学校低学年男子と高学年男子の間で有意差が見られたのは、「他人の性器やプライベートゾーン

に触る」であり、小学校低学年に占める割合が高い傾向が示され、「性行為について場をわきまえず知りたがる」「施設内の児童（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ」は小学校高学年に占める割合の方が高い傾向が見られた。

小学校低学年男子と中学生男子では、「他人の性器やプライベートゾーンに触る」「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく」が小学校低学年に多くみられる傾向が示された。

小学校高学年と中学生では「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく」が小学校高学年に多くみられる傾向が示された。「アダルトサイト、ポルノ所有」は中学生に多い傾向が示された。

②女子の年代間の比較

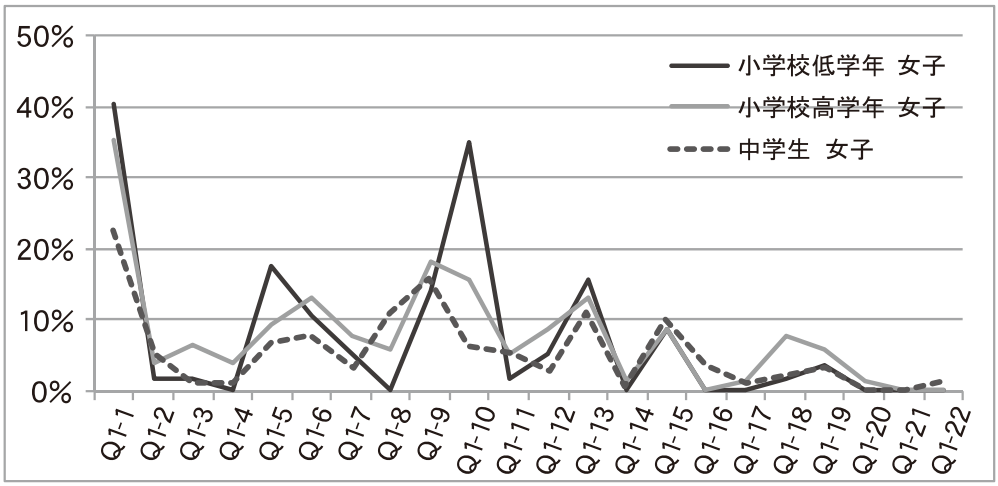


図１４．女子全年代の性的問題の割合

表８．女子の性的問題の割合（%）と年代別の統計的分析の結果

			女子											
			低学年-高学年				低学年-中学生				高学年-中学生			
			低学年	高学年	*p*		低学年	中学生	*p*		高学年	中学生	*p*	
性的問題）Ｑ１（	1	人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る	40	35			40	22	0.005	**	35	22	0.060	*
	2	異性のような服装をする	2	4			2	5			4	5		
	3	人前で性器を触ったり、マスターベーションする	2	7			2	1			7	1	0.003	**
	4	性器を描いたり、作ったりする	0	4			0	1			4	1		
	5	他人の性器やプライベートゾーンに触る	18	9	0.039	*	18	7	0.003	**	9	7		
	6	卑猥な言葉、性行為に関する声を出す	11	13			11	8			13	8		
	7	性器やプライベートゾーンを他人に見せる	5	8			5	3			8	3	0.029	*
	8	性行為について話す	0	6			0	11	0.009	**	6	11		
	9	異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする	14	18			14	16			18	16		
	10	ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく	35	16	0.002	**	35	6	0.000	**	16	6	0.003	**
	11	性行為について、場をわきまえず、知りたがる	2	5			2	5			5	5		
	12	Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする	5	8			5	3			8	3	0.016	*
	13	ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する	16	13			16	11			13	11		
	14	アダルトサイトやポルノ写真を所有する	0	1			0	0			1	0		
	15	施設内の子ども(同世代)とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	9	8			9	10			8	10		
	16	施設外の子ども(同世代)とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0	0			0	3			0	3		
	17	施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ	0	1			0	1			1	1		
	18	異性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する。	2	8			2	2			8	2	0.014	*
	19	同性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する	4	6			4	3			6	3		
	20	接触を伴わない性的な嫌がらせ・脅しをする	0	1			0	0			1	0		
	21	性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする	0	0			0	0			0	0		
	22	異性の居室へ侵入をする	0	0			0	1			0	1		

*＜.05　**＜.01

小学校低学年女子と高学年女子の間では、「他人の性器やプライベートゾーンに触る」「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく」が小学校低学年に多い傾向が示された。

小学校低学年女子と中学生女子では、「人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る」「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく」「他人の性器やプライベートゾーンに触る」は小学校低学年に多い傾向が示され、「性行為について話す」は中学生に多い傾向が示された。

また小学校高学年女子と中学生女子については、「人にベタベタする、相手の身体にさわる」「人前で性器をさわる」「性器、プライベートゾーンを見せる」「知らない大人に抱きつく」「性的な遊び」「異性の性的接触の強要」「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」が小学校高学年に多い傾向が示された。

３．児童の示す「その他の問題行動」

本節では、施設で起きる「その他の問題行動」について、該当する児童の実数、児童全体に占める割合を示し、統計的に分析した結果を示す。各項目について、（１）は全入所児童に占める該当児童数の割合を示し、男女間の比較を行い、（２）については年代間、男女間の比較を行った。年代、性別によって母数に差があるため、各群の割合の差を見るために母比率の検定を行った。

（１）入所児童全体における人数と割合（小学生・中学生）

「その他の問題行動」は性的問題以外の衝動性や支配性、社会性、親密さの課題等 19 項目である。「その他の問題行動」を示す児童の入所児童全体に占める割合を図 15に示した。男女別にグラフにしたものが図 16 である。また項目別の人数、割合を一覧にしたのが表 9 である。

全ての群で高頻度だった項目が「自己評価が低い」で、全入所児童の 58％で認められた。その他、在籍児童全体のうち 20％以上を占める項目は、「相手の立場で考えられない」(49％)、「人との距離が適切でない」(45％)、「大人に適切に頼ることができない」(36％)、「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」(35％)、「職員に対する反抗、暴力がある」(30％)、「人に対する支配性が強く、コントロールしようとする」(27％)、「同年齢の友人と遊べない」(25％)、「他者に従順で影響を受けやすい」(20％)であった。直接的に性的問題に関連するものとして、「性的接触に抵抗がなく、誘惑にのりやすい」が17％、「過去の接触型性的虐待被害」「過去の非接触型性的虐待被害」ともに9％であった。表 10 は統計的検定の結果である。

表９．その他の問題の項目別の人数、割合

	Q2-1	Q2-2	Q2-3	Q2-4	Q2-5	Q2-6	Q2-7	Q2-8	Q2-9	Q2-10	Q2-11	Q2-12	Q2-13	Q2-14	Q2-15	Q2-16	Q2-17	Q2-18	Q2-19
小学校低学年　男子	39	24	53	45	8	10	25	49	5	10	0	13	22	0	11	19	2	4	26
(n=87)	45%	28%	61%	52%	9%	11%	29%	56%	6%	11%	0%	15%	25%	0%	13%	22%	2%	5%	30%
小学校低学年　女子	25	12	31	29	7	11	18	29	9	12	0	8	17	0	9	10	2	1	17
(n=57)	44%	21%	54%	51%	12%	19%	32%	51%	16%	21%	0%	14%	30%	0%	16%	18%	4%	2%	30%
小学校高学年　男子	99	56	111	132	13	35	69	101	10	19	0	30	73	0	32	44	11	9	82
(n=218)	45%	26%	51%	61%	6%	16%	32%	46%	5%	9%	0%	14%	33%	0%	15%	20%	5%	4%	38%
小学校高学年　女子	77	40	72	89	11	26	52	65	19	18	0	20	60	2	25	25	20	9	49
(n=153)	50%	26%	47%	58%	7%	17%	34%	42%	12%	12%	0%	13%	39%	1%	16%	16%	13%	6%	32%
中学生　男子	124	77	138	171	3	50	66	64	16	16	2	33	107	7	43	54	8	24	73
(n=279)	44%	28%	49%	61%	1%	18%	24%	23%	6%	6%	1%	12%	38%	3%	15%	19%	3%	9%	26%
中学生　女子	85	44	84	116	4	37	46	48	29	20	0	37	88	3	25	50	71	20	58
(n=212)	40%	21%	40%	55%	2%	17%	22%	23%	14%	9%	0%	17%	42%	1%	12%	24%	33%	9%	27%
合計	449	253	489	582	46	169	276	356	88	95	2	141	367	12	145	202	114	67	305
%	45%	25%	49%	58%	5%	17%	27%	35%	9%	9%	0%	14%	36%	1%	14%	20%	11%	7%	30%

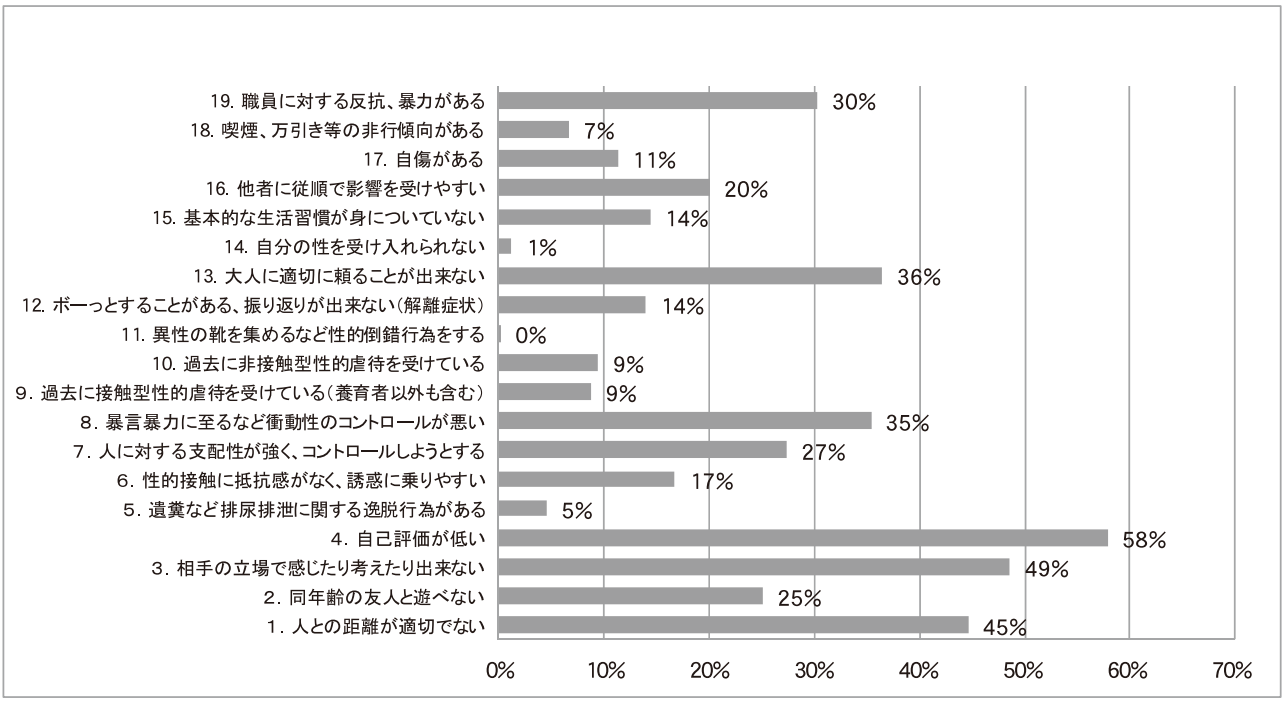


図１５．全入所児童における「その他の問題行動」の割合

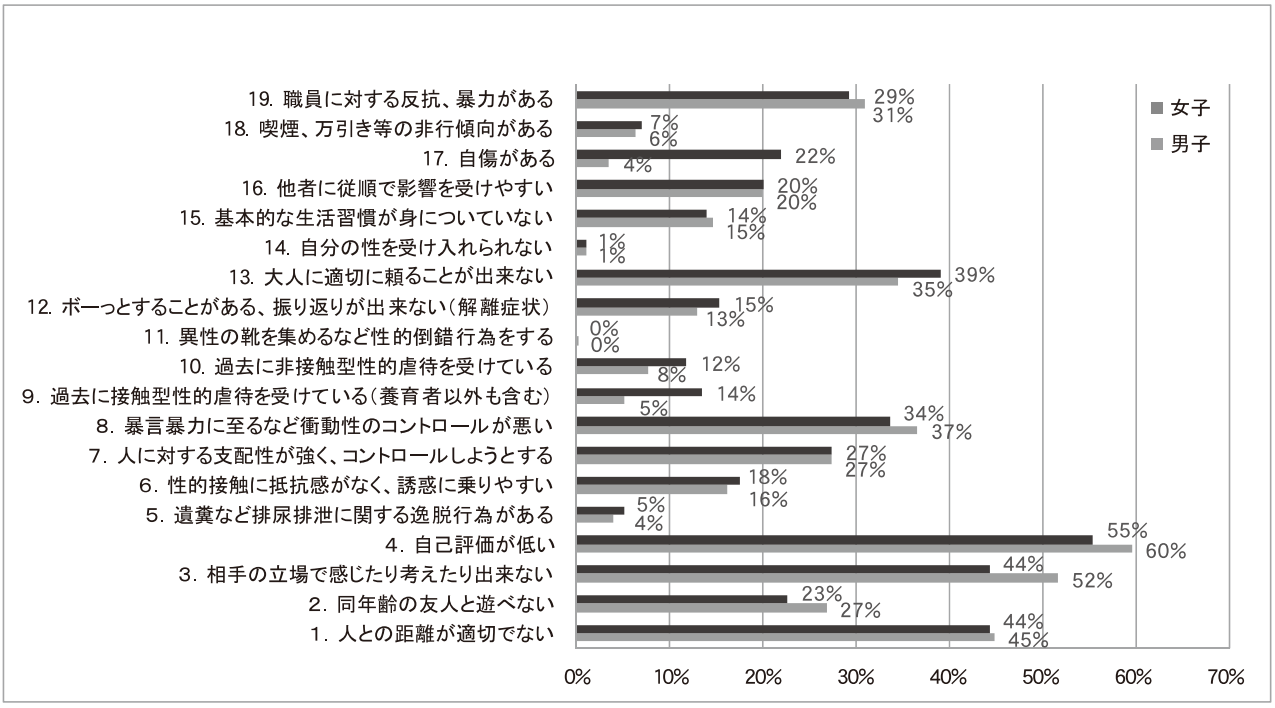


図１６．男女別の「その他の問題行動」の割合（%）

男女間で統計的に有意差が認められたもの以下に示す。「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」は男子に多い傾向が示され、「自傷がある」「過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）」「過去に非接触型性的虐待を受けている」は女子に多い傾向が示された。

表１０．小学生・中学生の「その他の問題行動」の割合（%）の男女差

	男子 (n=584)	女子 (n=422)	*p*
1　人との距離が適切でない	44.9%	44.3%	
2　同年齢の友人と遊べない	26.9%	22.7%	
3　相手の立場で感じたり考えたり出来ない	51.7%	44.3%	0.020　*
4　自己評価が低い	59.6%	55.5%	
5　遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある	4.1%	5.2%	
6　性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい	16.3%	17.5%	
7　人に対する支配性が強く、コントロールしようとする	27.4%	27.5%	
8　暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い	36.6%	33.6%	
9　過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）	5.3%	13.5%	0.000　**
10　過去に非接触型性的虐待を受けている	7.7%	11.8%	0.027　*
11　異性の靴を集めるなど性的倒錯行為をする	0.3%	6.0%	
12　ボーっとすることがある、振り返りが出来ない（解離症状）	13.0%	15.4%	
13　大人に適切に頼ることが出来ない	34.6%	39.1%	
14　自分の性を受け入れられない	1.2%	1.2%	
15　基本的な生活習慣が身についていない	14.7%	14.0%	
16　他者に従順で影響を受けやすい	20.0%	20.1%	
17　自傷がある	3.6%	22.0%	0.000　**
18　喫煙、万引き等の非行傾向がある	6.3%	7.1%	
19　職員に対する反抗、暴力がある	31.0%	29.4%	

*＜.05　**＜.01

（２）年代別、男女別の「その他の問題行動」

（ア）　小学校低学年児童の「その他の問題行動」（男女別）

小学校低学年について、割合を算出し男女別にグラフを作成した（図 17、18）。またその割合を男女間で比較するために図 19 を作成し、さらに母比率の検定を行った（表 11）。

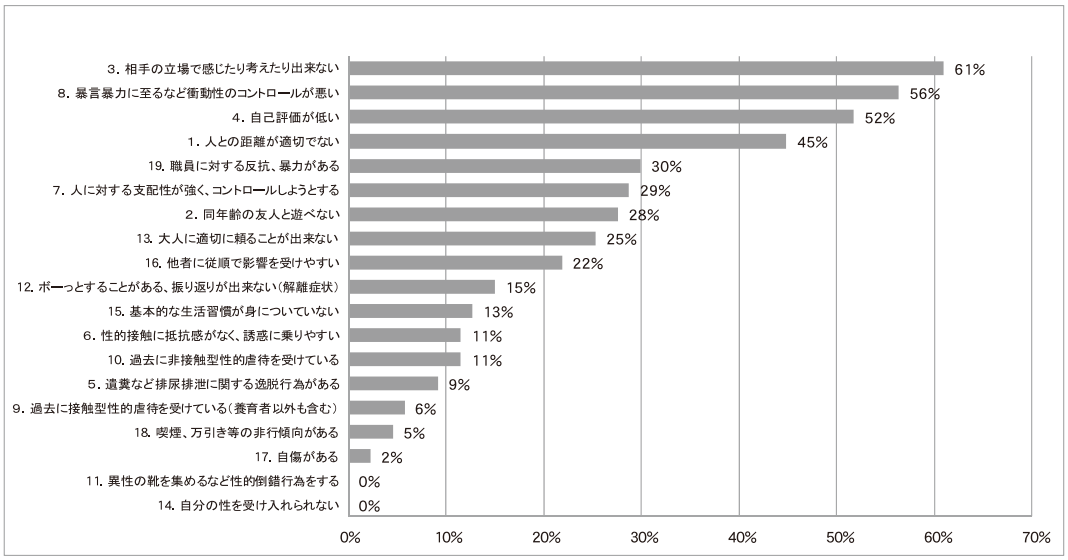


図１７．小学生低学年男子における「その他の問題行動」（n=87）

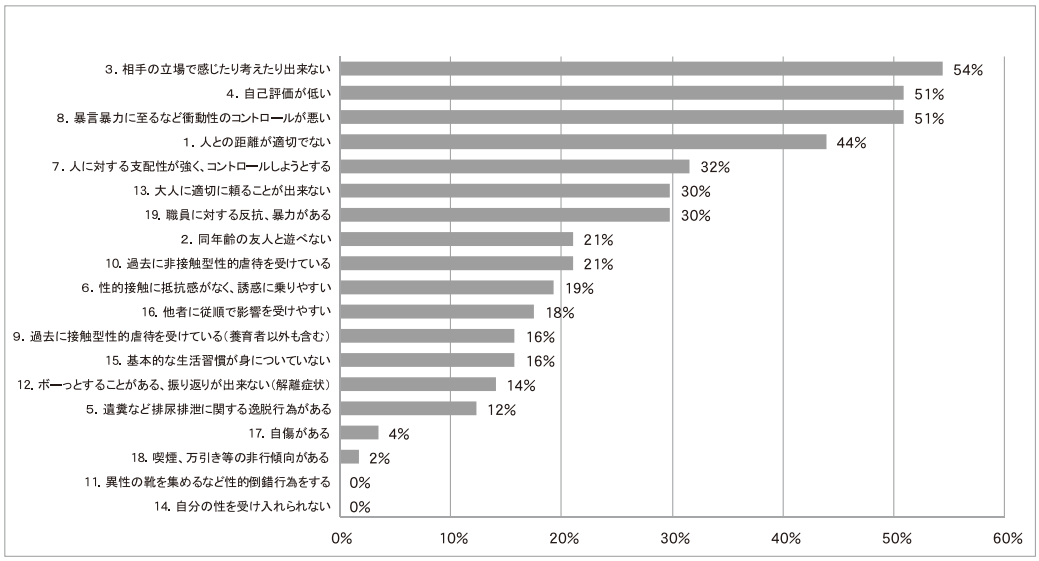


図１８．小学生低学年女子における「その他の問題行動」（n=57）

小学校低学年男子では、「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」(61%)、「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」(56%)、「自己評価が低い」(52%)が高く、次いで「人との距離が適切でない」(45%)、「職員に対する反抗、暴力がある」(30%)、「人に対する支配性が強く、コントロールする」(29%)、「同年齢の友人と遊べない」(28%)、「大人に適切に頼れない」(25%)、「他者に従順で影響を受けやすい」(22%)と続く。また「解離症状」は15%あり、「性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい」は11% である。「過去の接触型性的虐待の被害」は6%で「過去の非接触型性的虐待の被害」は11%であった。

小学校低学年女子は、「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」(54%)、「自己評価が低い」(51%)、「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」(51%)、「人との距離が適切でない」(44%)、

「人に対する支配性が強く、コントロールしようとする」(32%)、「職員に対する反抗、暴力がある」(30%)、「大人に適切に頼ることが出来ない」(30%) と続く。

統計的検定において男女間の有意差が示されたのは、「過去に接触型性的虐待を受けている」で、女子の割合が高いことが示された。接触型の性被害では男子で 6%、女子で 16%、また非接触型の性被害は男子で 11%、女子で 21%であった。

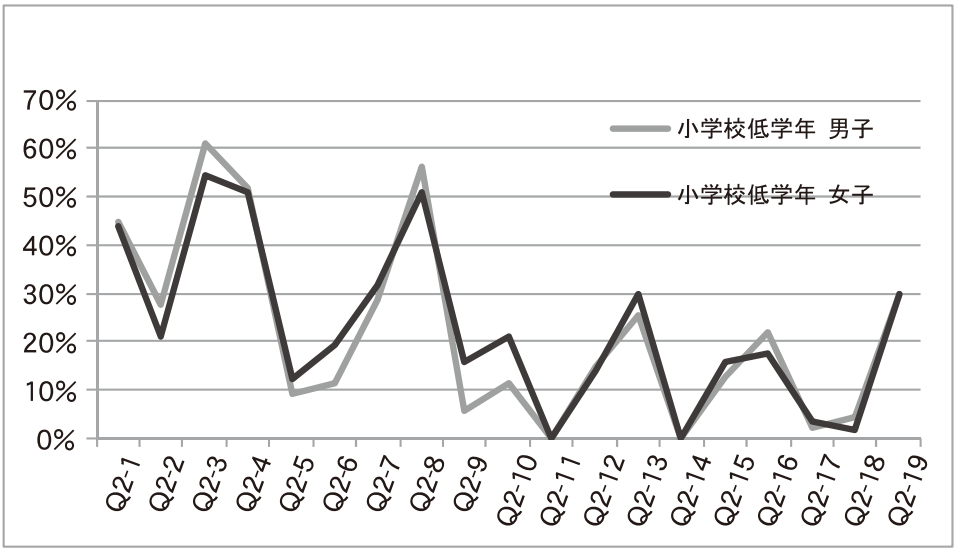


図１９．小学校低学年男女の「その他の問題行動」の割合

表１１．小学校低学年における「その他の問題行動」の割合（%）の男女差

			小学校　低学年			
			男（87）	女（57）	*p*	
その他の問題（Q2）	1	人との距離が適切でない	45	44		
	2	同年齢の友人と遊べない	28	21		
	3	相手の立場で感じたり考えたり出来ない	61	54		
	4	自己評価が低い	52	51		
	5	遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある	9	12		
	6	性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい	11	19		
	7	人に対する支配性が強く、コントロールしようとする	29	32		
	8	暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い	56	51		
	9	過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）	6	16	0.047	*
	10	過去に非接触型性的虐待を受けている	11	21		
	11	異性の靴を集めるなど性的倒錯行為をする	0	0		
	12	ボーっとすることがある、振り返りが出来ない（解離症状）	15	14		
	13	大人に適切に頼ることが出来ない	25	30		
	14	自分の性を受け入れられない	0	0		
	15	基本的な生活習慣が身についていない	13	16		
	16	他者に従順で影響を受けやすい	22	18		
	17	自傷がある	2	4		
	18	喫煙、万引き等の非行傾向がある	5	2		
	19	職員に対する反抗、暴力がある	30	30		

*＜.05　**＜.01

（イ） 小学校高学年における「その他の問題行動」（男女別）

小学校高学年にみられた「その他の問題行動」について、割合を算出し男女別にグラフを作成した（図20、21）。またその割合を男女間で比較するために図 22 を作成し、さらに母比率の検定を行った（表12）。

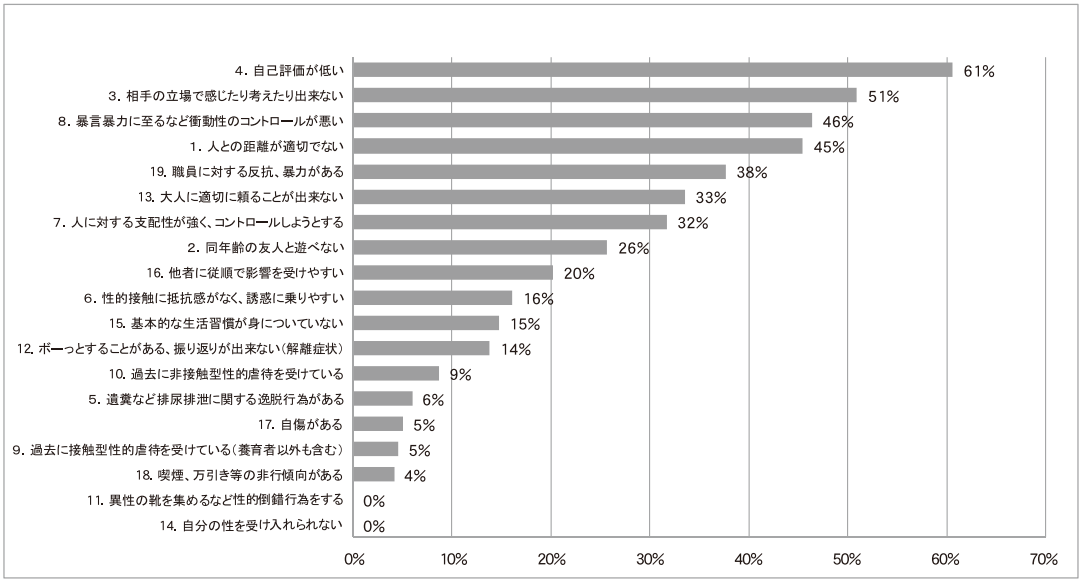


図２０．小学生高学年男子における「その他の問題」（n=218）

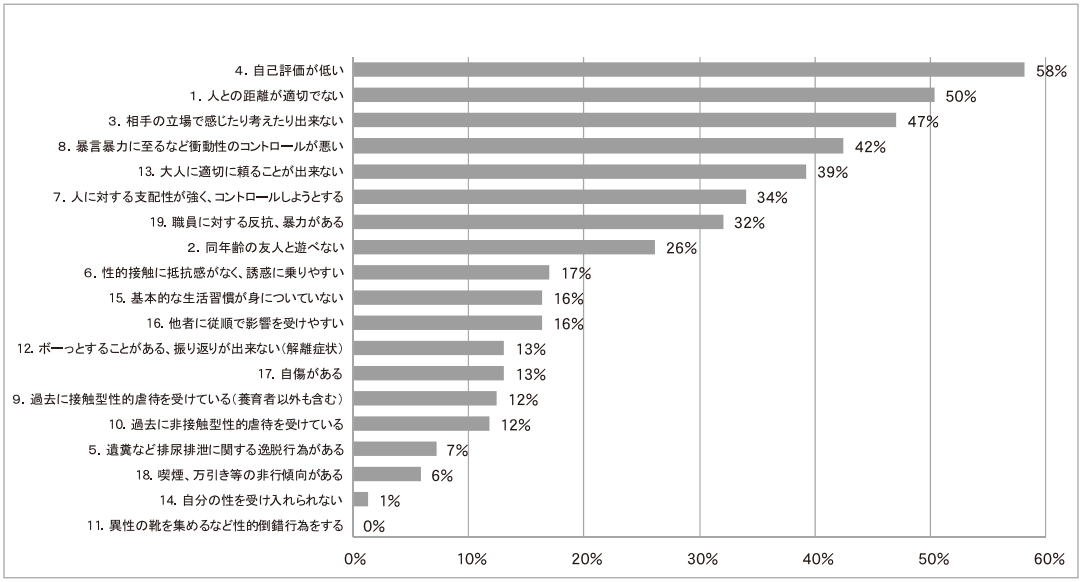


図２１．小学生高学年女子における「その他の問題」（n=153）

男子では、「自己評価が低い」（61%）、「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」（51%）、「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」（46%）、「人との距離が適切でない」（45%）、「職員に対する反抗、暴力がある」（38%）、「大人に適切に頼ることが出来ない」（33%）、「人に対する支配性、コントロール」（32%）、「同年齢の友人と遊べない」（26%）、「他者に従順」（20%）、「性的接触への抵抗なし」（16%）と続く。

女子では、「自己評価が低い」（58%）、「人との距離が適切でない」（50%）、「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」（47%）、「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」（42%）、「大人に適切に頼ることが出来ない」（39%）、「人に対する支配性が強く、コントロールする」（34%）、「職員に対する反抗、暴力がある」（32%）、「同年齢と遊べない」（26%）、「性的接触の抵抗感なし」（17%）と続く。接触

型の性被害については女子12%、男子5%。非接触型性被害は女子12%、男子9%であった。

男女間において、統計的に有意差が認められたのは、「自傷がある」「過去に接触型性的虐待を受けている」であり、女子に多い傾向が示された。

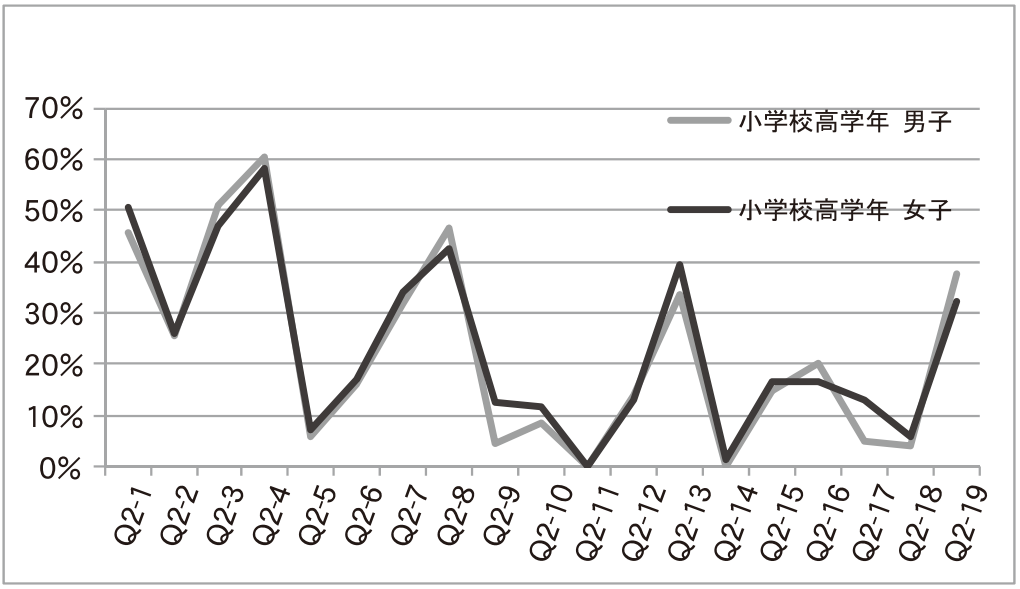


図２２．小学校高学年男女の「その他の問題行動」男女の割合

表１２．小学校高学年における「その他の問題行動」の割合（%）の男女差

			小学校　高学年　男女			
			男（218）	女（153）	*p*	
その他の問題（Q2）	1	人との距離が適切でない	45	50		
	2	同年齢の友人と遊べない	26	26		
	3	相手の立場で感じたり考えたり出来ない	51	47		
	4	自己評価が低い	61	58		
	5	遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある	6	7		
	6	性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい	16	17		
	7	人に対する支配性が強く、コントロールしようとする	32	34		
	8	暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い	46	42		
	9	過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）	5	12	0.006	**
	10	過去に非接触型性的虐待を受けている	9	12		
	11	異性の靴を集めるなど性的倒錯行為をする	0	0		
	12	ボーっとすることがある、振り返りが出来ない（解離症状）	14	13		
	13	大人に適切に頼ることが出来ない	33	39		
	14	自分の性を受け入れられない	0	1		
	15	基本的な生活習慣が身についていない	15	16		
	16	他者に従順で影響を受けやすい	20	16		
	17	自傷がある	5	13	0.006	**
	18	喫煙、万引き等の非行傾向がある	4	6		
	19	職員に対する反抗、暴力がある	38	32		

*＜.05　**＜.01

（ウ）　中学生における「その他の問題行動」（男女別）

中学生にみられた「その他の問題行動」について、割合を算出し男女別にグラフを作成した（図 23、24）。またその割合を男女間で比較するために図25を作成し、さらに母比率の検定を行った（表13）。

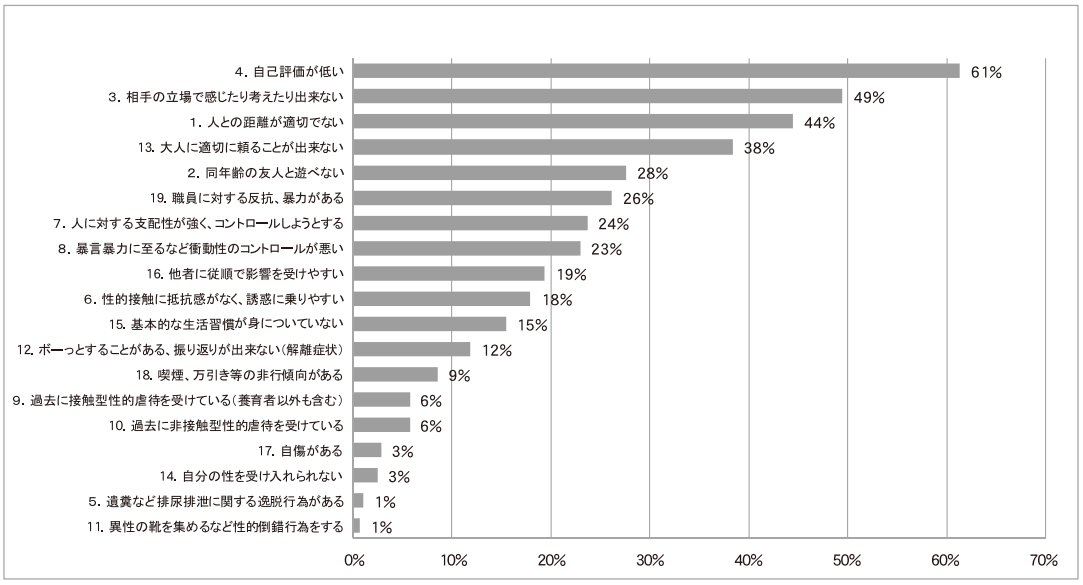


図２３．中学生男子における「その他の問題行動」（n=279）

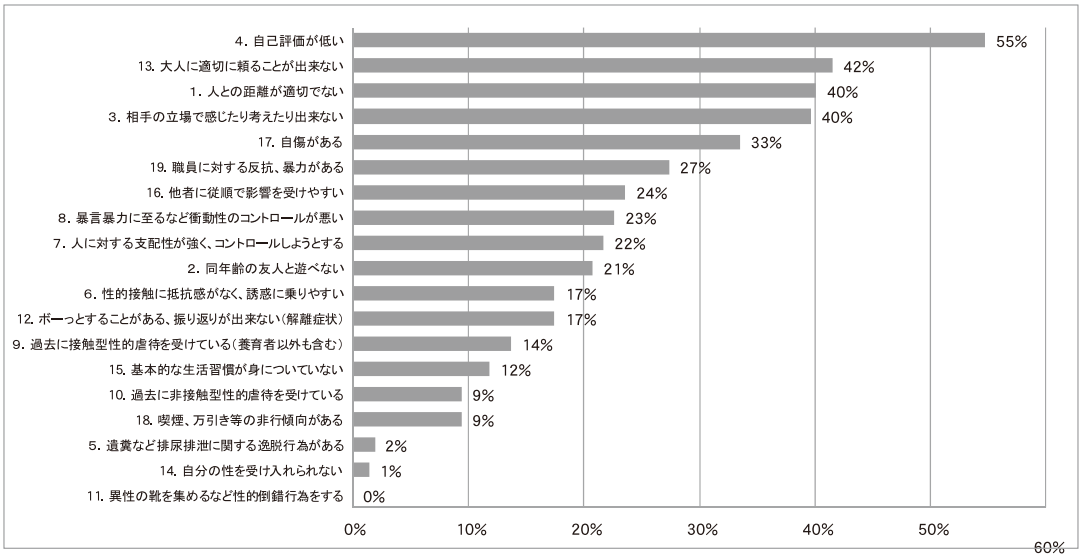


図２４．中学生女子における「その他の問題行動」（n=212）

男子では、「自己評価が低い」（61%）、「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」（49%）、「人との距離が適切でない」（44%）、「大人に適切に頼ることが出来ない」（38%）、「同年齢の友人と遊べない」（28%）、「職員に対する反抗、暴力がある」（26%）、「人に対する支配性」（24%）、「衝動コントロール」（23%）、「他者に従順」（19%）、「性的接触の抵抗感のなさ」（18%）と続く。

女子では、「自己評価が低い」（55%）、「大人に適切に頼ることが出来ない」（42%）、「人との距離が適切でない」（40%）、「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」（40%）、「自傷がある」（33%）、「職員に対する反抗、暴力がある」（27%）、「他者に従順」（24%）、「衝動コントロール」（23%）、「支配性」（22%）、「同年齢の友人と遊べない」（21%）、「性的接触への抵抗感のなさ」（17%）と続く。

男女間に有意差が認められたのは、「相手の立場で感じたり、考えたりできない」が、男子に多く見られる傾向が示され、「自傷がある」「過去に接触型性的虐待を受けている」は女子に多い傾向が示された。

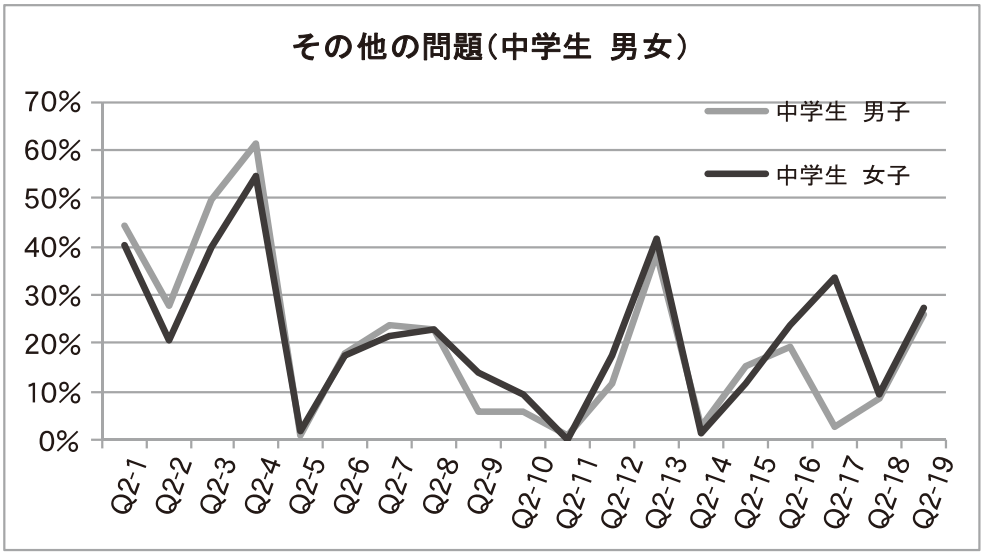


図２５．中学生男女の「その他の問題行動」の割合

表１３．学年ごとの「その他の問題行動」の割合（%）の男女差

			中学生　男女			
			男(279)	女(212)	*p*	
その他の問題（Q2）	1	人との距離が適切でない	44	40		
	2	同年齢の友人と遊べない	28	21		
	3	相手の立場で感じたり考えたり出来ない	49	40	0.03	*
	4	自己評価が低い	61	55		
	5	遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある	1	2		
	6	性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい	18	17		
	7	人に対する支配性が強く、コントロールしようとする	24	22		
	8	暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い	23	23		
	9	過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）	6	14	0.003	**
	10	過去に非接触型性的虐待を受けている	6	9		
	11	異性の靴を集めるなど性的倒錯行為をする	1	0		
	12	ボーっとすることがある、振り返りが出来ない（解離症状）	12	17		
	13	大人に適切に頼ることが出来ない	38	42		
	14	自分の性を受け入れられない	3	1		
	15	基本的な生活習慣が身についていない	15	12		
	16	他者に従順で影響を受けやすい	19	24		
	17	自傷がある	3	33	0.000	**
	18	喫煙、万引き等の非行傾向がある	9	9		
	19	職員に対する反抗、暴力がある	26	27		

*＜.05　**＜.01

（エ）　「その他の問題行動」の年代による比較

その他の問題について、男女別で年代差を検討するために該当数の割合を示し、統計的検定を行った。小学校低学年高学年、中学生の3群の性的問題がある児童の割合を図 26、27に示し、表 14、15 に検定結果を示した。

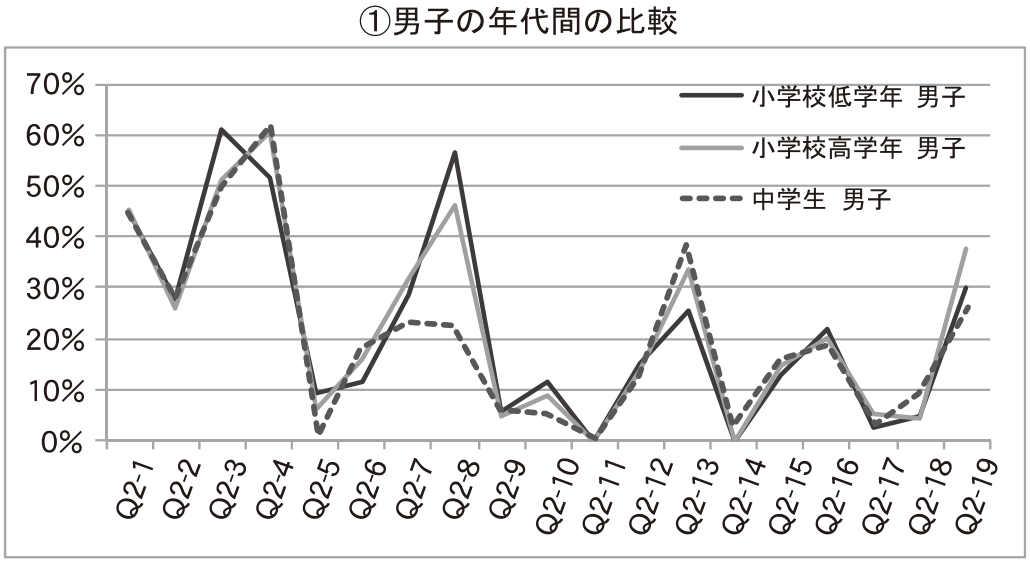


図２６．男子全年代の「その他の問題行動」の割合

表１４．男子全年代の「その他の問題行動」の割合（%）の年代差

		男子											
		低学年-高学年				低学年-中学生				高学年-中学生			
		低学年	高学年	*p*		低学年	中学生	*p*		高学年	中学生	*p*	
その他の問題（Q2）	1 人との距離が適切でない	45	45			45	44			45	44		
	2 同年齢の友人と遊べない	28	26			28	28			26	28		
	3 相手の立場で感じたり考えたり出来ない	61	51			61	49			51	49		
	4 自己評価が低い	52	61			52	61			61	61		
	5 遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある	9	6			9	1	0.000	**	6	1	0.002	**
	6 性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい	11	16			11	18			16	18		
	7 人に対する支配性が強く、コントロールしようとする	29	32			29	24			32	24	0.047	*
	8 暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い	56	46			56	23	0.000	**	46	23	0.000	**
	9 過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）	6	5			6	6			5	6		
	10 過去に非接触型性的虐待を受けている	11	9			11	6			9	6		
	11 異性の靴を集めるなど性的倒錯行為をする	0	0			0	1			0	1		
	12 ボーっとすることがある、振り返りが出来ない（解離症状）	15	14			15	12			14	12		
	13 大人に適切に頼ることが出来ない	25	33			25	38	0.026	*	33	38		
	14 自分の性を受け入れられない	0	0			0	3			0	3		
	15 基本的な生活習慣が身についていない	13	15			13	15			15	15		
	16 他者に従順で影響を受けやすい	22	20			22	19			20	19		
	17 自傷がある	2	5			2	3			5	3		
	18 喫煙、万引き等の非行傾向がある	5	4			5	9			4	9	0.047	*
	19 職員に対する反抗、暴力がある	30	38			30	26			38	26	0.006	**

*＜.05　**＜.01

男子の年代間では、小学校低学年と高学年の間では統計的有意差はなかった。

小学校低学年と中学生においては、「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」、「遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある」が低学年に多い傾向が示された。「大人に適切に頼ることができない」は中学生に多く見られる傾向が示された。

小学校高学年と中学生の間では「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」「職員に対する暴言、暴力がある」「人に対する支配性が強く、コントロールしようとする」「遺糞など排尿排泄に関する逸脱行動がある」が高学年男児に多い傾向が示され、「喫煙、万引き等の非行傾向がある」は中学生に多く認められた。

②女子の年代間の比較

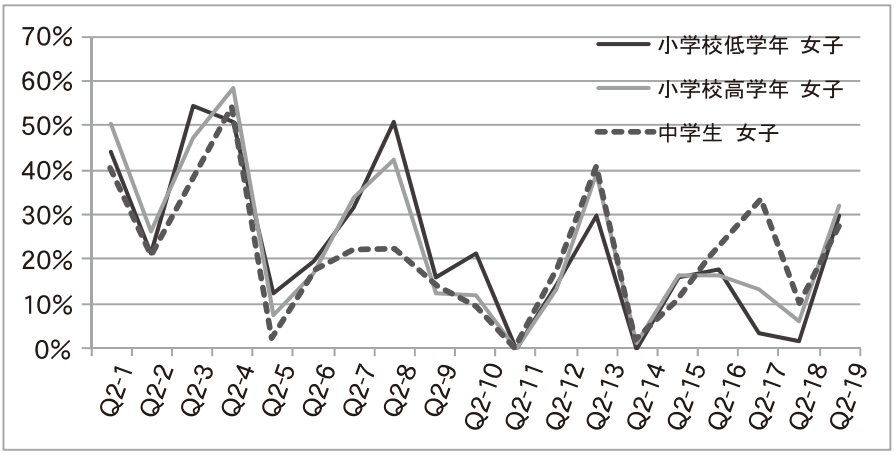


図２７．女子全年代の「その他の問題行動」の割合

表１５．女子全年代の「その他の問題行動」の割合（%）の年代差

			女子											
			低学年-高学年				低学年-中学生				高学年-中学生			
			低学年	高学年	*p*		低学年	中学生	*p*		高学年	中学生	*p*	
その他の問題（Q2）	1	人との距離が適切でない	44	50			44	40			50	40		
	2	同年齢の友人と遊べない	21	26			21	21			26	21		
	3	相手の立場で感じたり考えたり出来ない	54	47			54	40	0.045	*	47	40		
	4	自己評価が低い	51	58			51	55			58	55		
	5	遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある	12	7			12	2	0.000	**	7	2	0.012	*
	6	性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい	19	17			19	17			17	17		
	7	人に対する支配性が強く、コントロールしようとする	32	34			32	22			34	22	0.009	**
	8	暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い	51	42			51	23	0.000	**	42	23	0.000	**
	9	過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）	16	12			16	14			12	14		
	10	過去に非接触型性的虐待を受けている	21	12			21	9	0.016	*	12	9		
	11	異性の靴を集めるなど性的倒錯行為をする	0	0			0	0			0	0		
	12	ボーっとすることがある、振り返りが出来ない（解離症状）	14	13			14	17			13	17		
	13	大人に適切に頼ることが出来ない	30	39			30	42			39	42		
	14	自分の性を受け入れられない	0	1			0	1			1	1		
	15	基本的な生活習慣が身についていない	16	16			16	12			16	12		
	16	他者に従順で影響を受けやすい	18	16			18	24			16	24		
	17	自傷がある	4	13	0.044	*	4	33	0.000	**	13	33	0.000	**
	18	喫煙、万引き等の非行傾向がある	2	6			2	9			6	9		
	19	職員に対する反抗、暴力がある	30	32			30	27			32	27		

*＜0.05　**＜.01

女子の年代間において小学校低学年と高学年の間で差が認められたのは、「自傷がある」で高学年に多い傾向が示された。

小学校低学年と中学生の間では、「相手の立場で感じたり考えたりできない」「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」「過去に非接触型性的虐待を受けている」「遺糞など排尿排泄に関する逸脱行動がある」が低学年に多く認められ、「自傷がある」が中学生に多く認められた。

小学校高学年と中学生については、「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」「人に対する支配性が強く、コントロールしようとする」「遺糞など排尿排泄に関する逸脱行動がある」が高学年に多く認められ、「自傷」が中学生に多く認められた。

４．施設内の性的加害–被害の問題

過去３年間に性的加害をした児童がいたと回答した施設は27 施設であり、7割をこえていた（図28）。表 16 は過去3年間の性的加害行動があったと回答した施設（27 施設）における加害行動に至った児童の人数、その内措置変更した人数、措置変更しなかった人数、措置変更せずに改善に至った人数を一覧にしたものである。加害行動に至った児童は 99 人、施設ごとの比較では、最大値は 11（人）、最小値は１（人）と幅があった。措置変更をしたのは18人であり、措置変更していない児童は77人、うち改善したのは58人（75％）であるが、19人（25％）は改善できていずに施設に残っていた。

表１６．過去三年間の性的加害行動への対応

施設	加害行動に至った人数	措置変更	措置変更せず	措置変更せず改善
1	2	0	2	2
2	3	1	2	2
3	1	1	0	0
4	3	0	3	0
5	1	1	0	0
6	5	1	4	3
7	6	1	5	1
8	4	0	4	4
9	5	0	5	3
10	2	1	1	1
11	1	0	1	1
12	2	0	2	1
13	6	1	5	5
14	3	0	3	0
15	1	0	1	1
16	4	1	3	2
17	7	1	6	5
18	1	0	1	1
19	4	0	4	3
20	1	0	0	0
21	1	0	1	1
22	11	0	11	10
23	3	2	1	1
24	3	1	2	2
25	4	2	0	0
26	11	4	7	6
27	4	0	4	3
合計	99	18	77	58

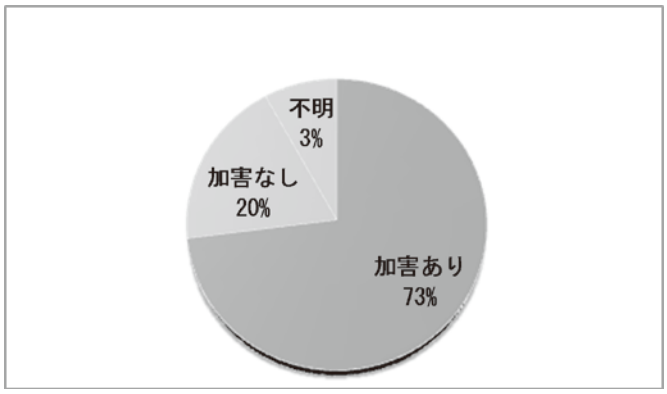


図２８．過去３年間で施設内での性的加害の問題の有無（施設数の割合）

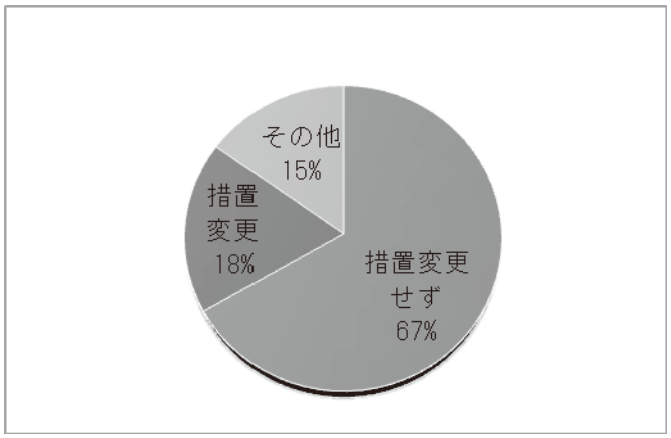


図２９.性加害児童への対応（措置変更の有無）

性的加害を理由に措置変更になったのは 18 人であった。措置変更の判断をする際の指標としていたのは、行為の程度（回数や関わった人数、重篤さ）や改善の見込み、被害児童のケアの確保状況などであった。

逆に措置変更しなかった児童は、77 人で、理由は、「行為の程度が軽微である」こと、「反省し再発しないと考えられたため」「加害行為についても治療が必要」「改善の見込みが見られた（親の同意も得られた）」「環境設定が出来た」「措置変更先がない」、その他「別の理由で措置変更が決まっていた」「近いうちに家庭復帰が決まっていた」なども挙げられた。

措置変更しなかった児童数 77 人のうち、58 人に改善が見られたと回答されている（75%）。改善が見られた児童にどのような援助をしたか、またなぜ改善につながったと思うかという質問には、環境面での配慮（見回りの強化や性的言動への注意や境界のルール徹底など）に加え、加害児の再評価（アセスメント）と加害要因のアセスメント、行動の修正への動機づけ（一時保護して目標設定して再受け入れ）、行為の重大さの理解（反省日課や振りかえり）、被害体験のケア、心理教育（対処行動、自己コントロール等）、性教育、多くの人が関わる（保護者との関係づくり、警察から話をしてもらう）などが挙げられた。

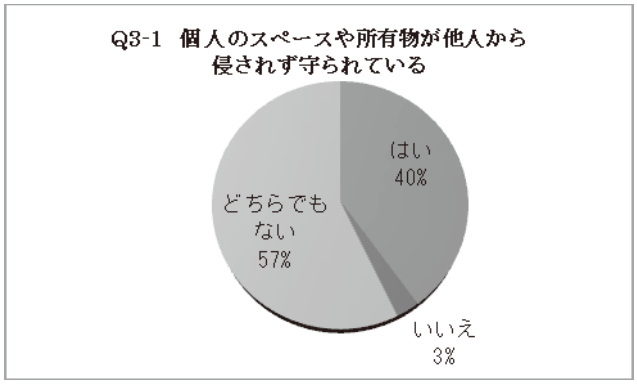
５．施設の取り組み

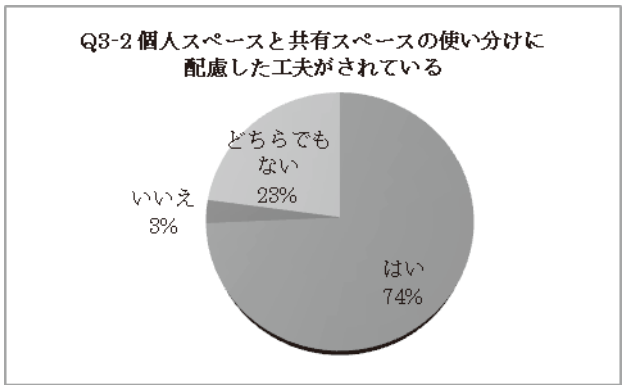
性的問題行動に関連すると思われる施設の状況について尋ねた。次にそれぞれ質問カテゴリーごとに結果をまとめる。

（１）境界について

この項目は、巻末にのせたQ3の質問項目1～7が該当する。まず質問項目1、2は、「個人の境界」がどのくらい守られているか尋ねた質問である。集団生活を基本とする施設での生活は、個人の境界・プライバシーを保つことは難しい。これは、個人のスペース・空間、所有物、さらにはトイレや、入浴についてもいえる。個人のスペースや所有物が他人から守られている施設は40％だった（質問1）。個人の境界プライバシーや境界に配慮し、工夫している施設は74％に上った（質問2）。

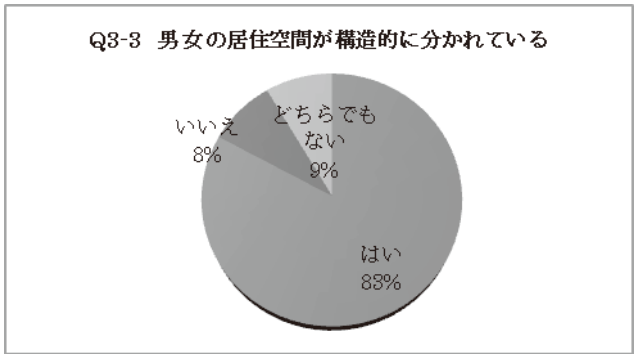
【個人の境界】

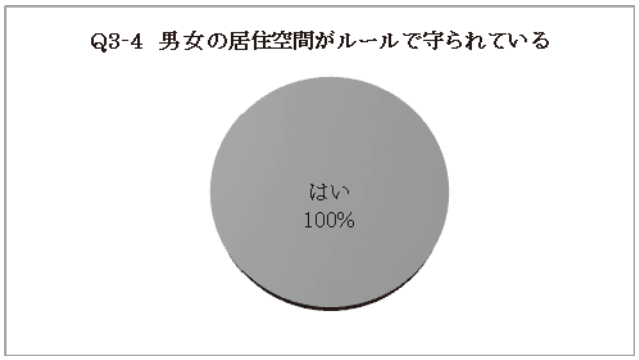




【男女の境界】

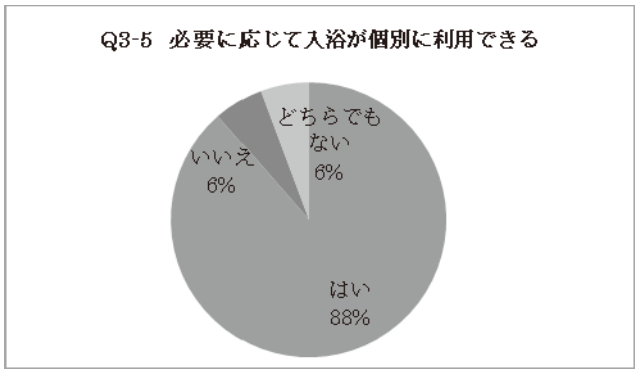
次に質問3・4は「男女の境界」に関する質問である。物理的な構造で境界設定をしている施設は83％で（質問3）、全ての施設でルールによって境界設定されていた（質問4）。

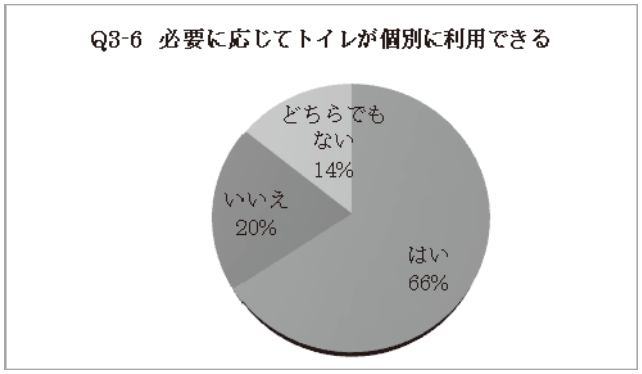




【入浴・トイレの境界】

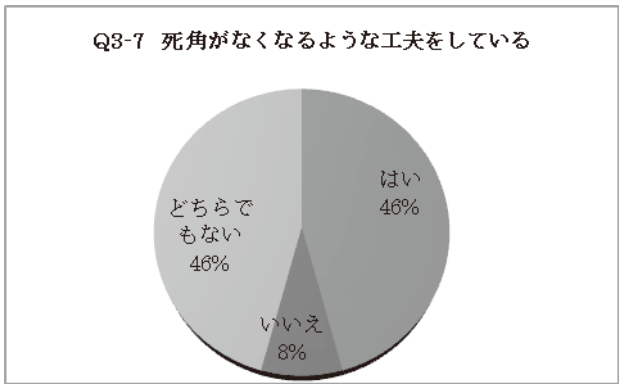
質問5・6は，入浴、トイレについて、個別利用が出来るかどうかを尋ねた質問である。必要に応じて個別入浴が可能な施設は 88%、必要に応じてトイレが個別に利用できる施設は 66%であった。





【死角】

性的問題は、職員の目のとどかないところ（死角）で起きることが多い。質問7はその死角を少なくする工夫をしているかどうかについて尋ねたものである。工夫をしている施設が 46%あった。

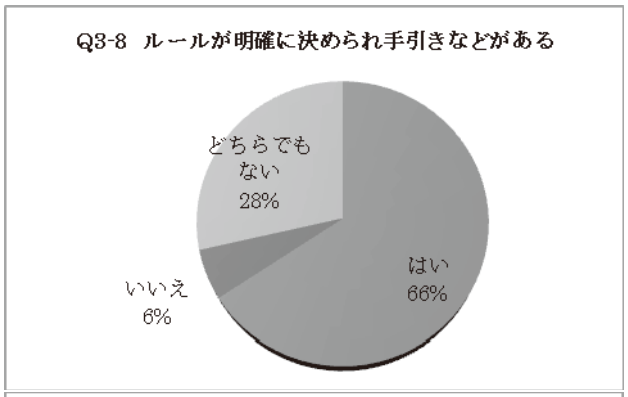


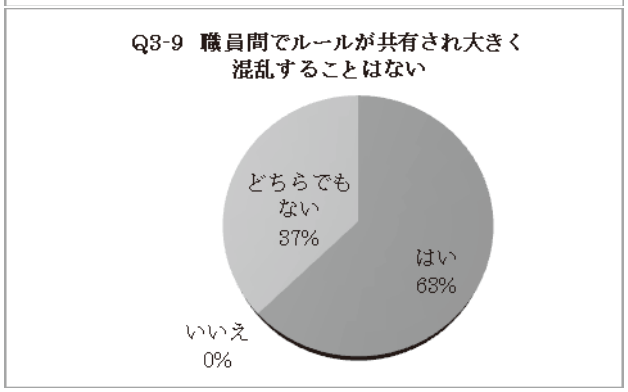
（２）ルール

質問8～12は、施設のルールについて尋ねたものである。

【ルールの統一】

質問8・9は、施設全体のルールがどのように守られているのかを尋ねている。66%の施設でルールが記載された生活の手引きなどが用意され、職員間でルールが統一され援助されていたのは63%の施設であった。

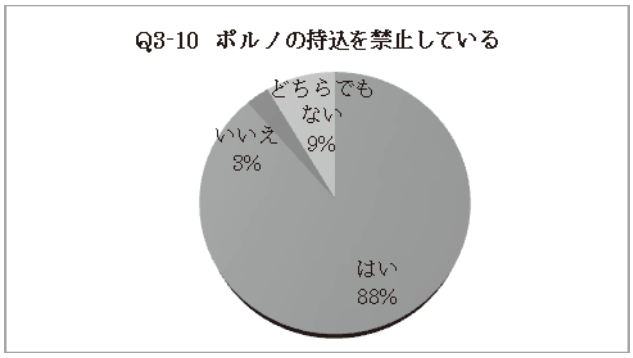


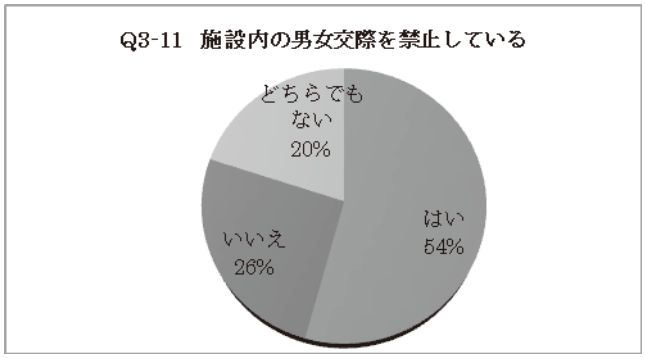


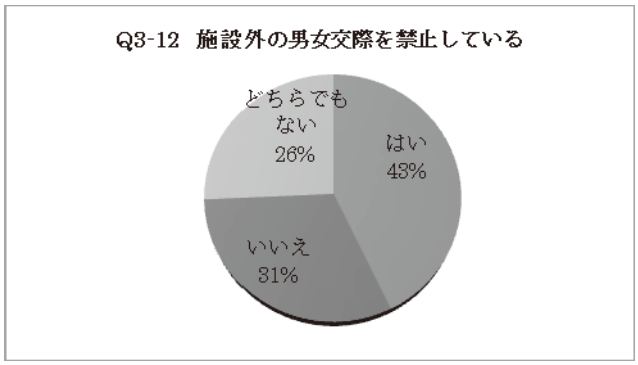
【性に関するルール】

児童の健康育成を考えた場合、性に関することがらを施設内でどこまで許容するかが問題となる。今回は、下記2点のみについてきいた。

質問10～12は，ポルノの持ち込みや男女交際について尋ねた質問である。ポルノの持ち込みは 88%で禁じられており、施設内男女交際は 54%、施設外男女交際は 43%の施設で禁止されていた。

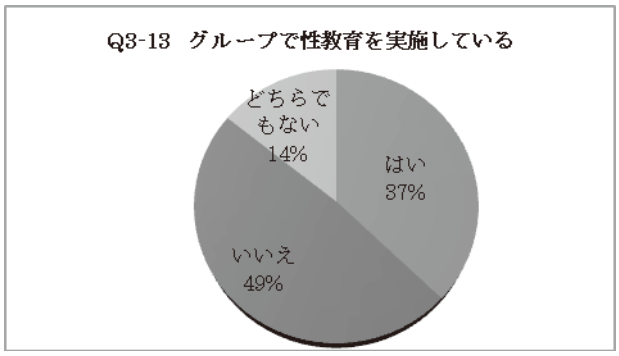




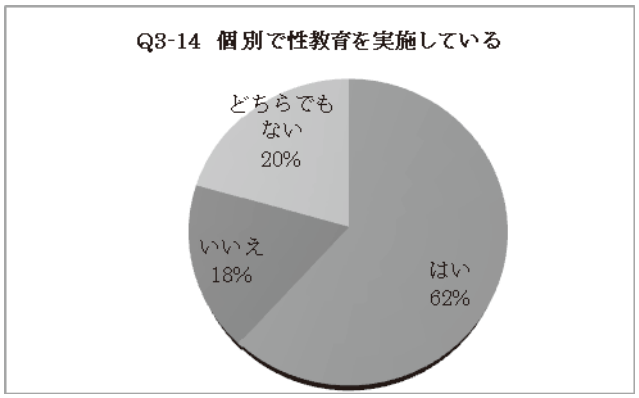


（３）性教育の取り組みについて

性教育を行っていない施設は 4 施設であった。グループで性教育を実施している施設は13施設(37%)であり、グループで性教育を実施していない施設は16施設であった(49%)。実施している性教育で最も多かったのは、学校(分校)と連携或いは授業の一環として「命の学習」「性教育」を行っているものだった(5施設)。ほかに男女別、年齢別のグループワークを行っている施設、看護師が性教育を行っている施設、身を守るという観点からのもの(CAP や警察に護身術を習う)などがあった。施設内で性教育委員会を組織し、子ども２～３人ずつに取り組みを行っている施設もあった。



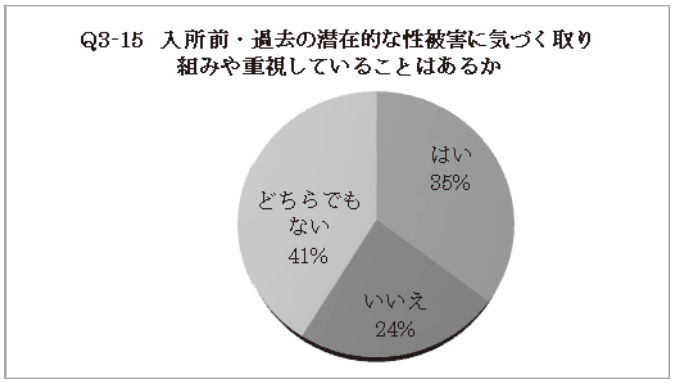
個別で性教育を行っている施設は、21施設(62%)とグループでのものより多く、実施していない施設は6施設(18%)であった。性教育は個別に行われているところが多いことが分かる。中でも個別面接や生活の中で適宜行っているのが最も多かった。具体的な内容としては、入浴中、初潮の際など、時に合わせて身体のことなどを教えていくものである。そのほか、問題行動があった場合にその振り返りとして「良いタッチ悪いタッチ」や「被害児の気持ちを考えさせる作文」「回復プログラム」を行っている施設、権利・人権的な視点からの実践、独自のプログラムを開発し、オリジナルの実施をしている施設が数施設あった。



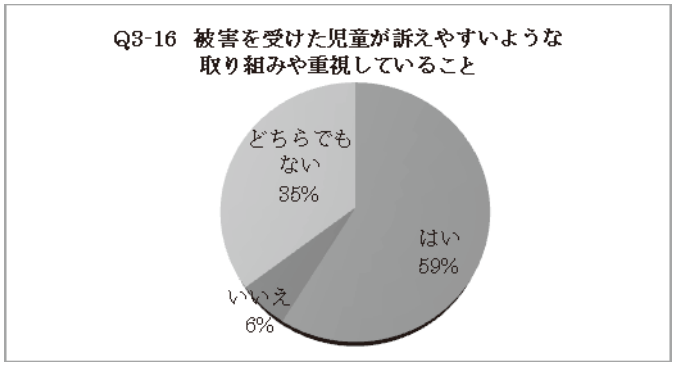
内容について自由記述してもらったところグループでの性教育は一般的な予防的性教育というニュアンスを含むが、年代を分けて行うなど工夫して行われているようである。一方で、一般的な予防的な性教育を行わない方がいい児童もいることを念頭において実践を行う必要がある。中にはそういった教育が不安や恐怖のトリガーになる場合もあり慎重になる必要がある。個別の性教育は、個々のニーズや状態にあわせた性教育というニュアンスがあり、性的問題を起こしたものへは再発防止の心理教育を行う、繰り返し振り返りを行うなどの実践があった。それ以外でも個々の発達段階に合わせ、集団では話しにくいことなどを個別で、ときに生活場面で行うという実践もあった。

（４）過去の性被害に気づくための取り組み

入所前の潜在的な性被害に気づくための取組みを重視している施設は35%であり、具体的取組みとしてあがったのは、大別すると2つに分けられた。1つは、入所時のアセスメントの重要性を指摘するものだった。とくに性的被害が疑われる事例に関しては、入所後の不測の事態を予防するために福祉司や関係者に聞き取りをしたり、調査の依頼をすることが強く求められるというものだった。もう１つは、性的発言や性化行動などの児童の言動から気づくようにするというものだった。実際の取組みとしては、「職員の心がけ」「注意している」といったものから「性的発言すべて記録に残すようにしている」「(職員の気づきを高めるための)研修をしている」といったものまであった。

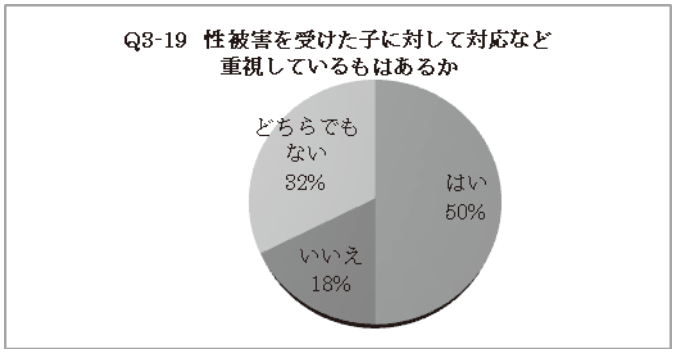


施設内で被害を受けた児童が訴えやすいような取り組みや重視している施設は59%であり、具体的取り組みとして多かったのは、「意見箱の設置」であった。また日常的な関わりの中で、大人との関わりの中から信頼感を育てることをベースに、個人面接、訴えることができるようになるための取組（CAP、予防的プログラム、冊子“みんなの安心のために”etc）も行われており、第3者評価委員や児相の福祉司など外部の人による聞き取りや施設内での定期的な聞き取りの実施などがあげられた。また少数ながら「性教育の実施が結果的に発見に繋がる」という回答もあった。訴えること以前に､搾取される経験を「ふつうのこと」として感じることに違和感を持てるようになることが必要である。



（５）性的被害を受けた児童に対する取り組みの工夫

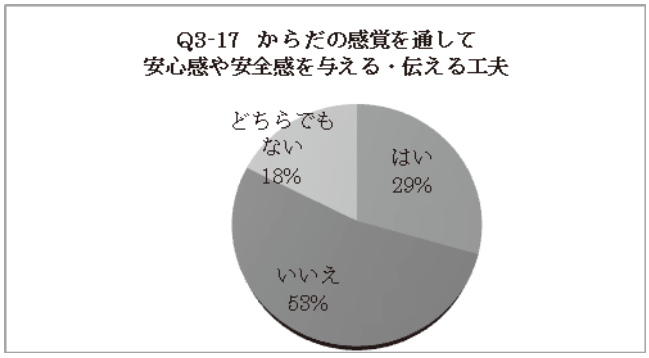
「性的被害を受けた児童に対して、取り組みや重視していることはありますか」という質問では、「はい」が14施設（50%）であった。共通して見られたのは、いかにして守られている安心感を持ってもらえるかという視点であった。そのための試みとしては､居室の構造（壁の設置など）や居室変更などの配慮と、個別セラピーや心理教育（アサーション等）、CAP、性教育（プライベートゾーンなど）の取組みなどであった。またフラッシュバックへの対応や不眠、悪夢への対応として医学的なケアもあげられていた。「どちらでもない」が10施設（32%）あったように、「本人が語れるようになるのを慎重に待つ」「被害を意識させるよりも、より現実的な問題への対応を重視している」といった回答も複数見られた。また家族面接についての言及も1施設あった。



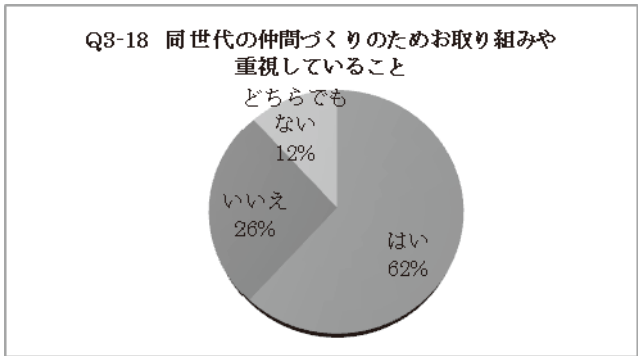
（６）からだの感覚を通して児童に安心感や安全感を与える工夫

Q17のからだの感覚を通して児童に安心感や安全感を与える工夫をしている施設は29％であり､14施設で自由記述に回答があった。実施形態は、個別のものと集団のものとあり、内容は以下の通りであった。

・深呼吸　・リラクゼーション　・EMDR 様のリラクゼーション　・動作法　・マッサージ
・肩もみ　・自立訓練法　・耳かき　・アロマテラピー　・一緒に寝転ぶ
・アトピーや怪我、発熱等のケア



同世代の仲間づくりのための取り組みや重視している施設は62％であり､具体的な取組みとしては、中学生会･高校生会などを月1程度実施するなど“児童の自治会”を行っている施設が多かった。またグループワークとして、調理・買い物・スポーツ・園芸・音楽・トレーニングといったものや構造化されたもの（セカンドステップやSST、プロジェクトアドベンチャー）があげられた。



（７）性的問題に関連して、児童相談所に期待すること

児童相談所に期待することは、入所前の性被害に関する情報収集や児童からの聞き取り、司法面

接等の調査に関わることと、被害児と加害児を分離するための迅速な一時保護などであった。特に、一時保護までに時間がかかってしまうと施設内の仕切り直しに限界がある、これができるシステムを考えてほしいという緊急時の一時保護利用に関する要望が多かった。また加害児童への治療プログラム等への期待もあげられた。性的問題が発覚した際に、第三者の聞き取りとして児童相談所が関わること、保護者対応への協力、職員へのアドバイスなど、「一緒に考えてほしい」という声もあげられた。

Ⅳ　考察

１.「性的問題行動」について

①全体的傾向

「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」に該当する児童が全体の 26%を占めた。この行動は性的な誘惑行動と誤解されやすく、施設内で性被害を受ける引き金になりやすい行動でもある。こうした子どもが 4 人に 1 人いる実態があることが今回の調査で明らかになった。これ以外にも、全情短施設における全入所児童の中で 1 割以上の子どもが示す性的問題としては、「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」「他人の性器やプライベートゾーンを触る」「異性に過剰に興味を示す」「性描写を見て過度に反応する」「ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく」であった。以上のような複数の性化行動が施設の集団生活の中で1割以上の子どもに存在することは、日々の養育の中で「性」を充分意識して、施設を運営し、子どもに関わる必要があることを投げかけている。

②男女差、年代差

性的行動の男女差を見た場合、「触る」「見せる」「強要する」などの性に直接結びついた行動は男子に多く、女子の場合は、「近づく」「接近する」というような間接的な形で問題となる場合が多いことが認められた。また、「異性のような服装をする」が、人数は少ないが女子に多いことも目立つ結果であった。男子の場合は衝動の行動化が直線的な形で表れ、女子の場合は間接的かつ複雑な形で示されるといえようか。女子の場合の間接的な表現は、寂しさの表れや甘えとも混同されやすく、その対応のあり方については、充分な検討が求められるといえよう。

（ア）男子

小学校低学年、高学年、中学校といった年齢群別にみると、低学年男子では、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」「他人の性器やプライベートゾーンを触る」が共に 26%と 4 分の 1 以上の子どもに認められ、次いで「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」(23%)、「ボランティアや実習生など良く知らない大人に抱きつく」(18%)、「性器やプライベートゾーンを他人に見せる」(10%)、「ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する」(10%)、「性行為について話す」(8%)、「同性にキスをしたり身体を触る、触られるなど性的接触を強要する」(8%)と続く。ベタベタしたり性器に触るなどは、日本では小学校低学年児童が通常でも示す行動と思われるが、その中に「同性にキスをしたり身体を触る、触られるなど性的接触を強要する」といった問題を示す子どもが 8%存在することには留意が必要であろう。低学年であればなおのこと深刻な性化行動と認識する必要がある。子どもの遊びの中に問題となる行動が含まれていることに留意し、対応することが求められよう。また過去における何らかの性的被害や性的刺激への曝露があったかどうかについても検討する必要があろう。

年齢が高まるにつれて性的な問題行動に変化がみられる。「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」「他人の性器やプライベートゾーンを触る」「ボランティアや実習生など良く知らない大人に抱きつく」などの率は年齢が高くなると次第にその割合が少なくなる。これは思春期に入ったことに伴う社会性や恥意識などの向上とも関係し、正常な発達過程と思われる。しかし、「施設以外の成人とキスをしたり身体に触れるなど性的接触をもつ」の項目を除いて、全ての項目が 0 % になるわけではない。中学生男子では小学校低学年で高位であった「ボランティアや実習生など良く知らない大人に抱きつく」は 1%と少ないものの、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」

「他人の性器やプライベートゾーンを触る」はそれぞれ 20%と 10%となっており、5 %以上の男子が示す性的問題行動を見ると、「性行為について話す」(10%)、「ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する」(9%)、「Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする」(8%)、「異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする」(8%)、「卑猥な言葉、性行為に関する声を出す」(8%)、「施設内の子どもとキスをしたり身体を触るなどの性的接触を持つ」(7%)、「同性にキスをしたり身体を触る、触られるなど性的接触を強要する」(6%)、「性器やプライベートゾーンを他人に見せる」(5%)、「アダルトサイトやポルノ写真を所有する」(5%)である。この中でも特に中学生年齢で「Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする」「施設内の子どもとキスをしたり身体を触るなどの性的接触を持つ」「同性にキスをしたり身体を触る、触られるなど性的接触を強要する」「性器やプライベートゾーンを他人に見せる」といった行動は、施設内の性加害問題に直結する問題でもあり、十分な配慮が必要な状況であることが分かる。

（イ）女子

女子の場合は、小学校低学年では、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」「ボランティアや実習生など良く知らない大人に抱きつく」がそれぞれ 40%と 35%であり、これらは男子でも多く認められる行動であるが、男子と比較してその割合はずっと高い。小学校女子の5%以上で認められる行動は、小学年男子の5%以上で認められる行動の内「同性にキスをしたり身体を触る、触られるなど性的接触を強要する」と「性行動について話す」を除いて、同じ項目が該当する。替わって「施設内の子どもとキスをしたり身体を触るなどの性的接触を持つ」(9%) と「Ｈごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする」(5%) が5%以上の女子が示す問題として認められる。このような性化行動が小学校低学年から認められることは、小さな年齢から性的被害を受ける可能性を示しており、中学生年齢のみならず、児童全体の問題として留意する必要があろう。

年齢層が上がるにつれて、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」「ボランティアや実習生など良く知らない大人に抱きつく」「他人の性器やプライベートゾーンを触る」はその率が下がり、逆に「性行動について話す」の率が上がっている。思春期に入り、身体接触に関する頻度が下がるのは通常の子どもの傾向と考えられる。しかし「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」は中学生でも 22%と高率であり、対人距離が適切に保てない子どもが 4 人に 1 人近く存在することを示唆している。また「異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする」は小学校低学年の 14%から微増し 16%の児童に認められる。「性行為について話す」は小学校の低学年の0%から11%の子どもに認められるようになる。性的な関心は年齢が上がるほど上昇するのは当然と思われるが、そこに対人距離の近さや対人境界の脆弱さの問題が加わることで、性的被害や加害の危険性が高まることが想像される。

２.「その他の問題行動」について

（１）性的問題以外の関連する問題

①全体傾向

性的問題以外の問題をみると、入所児童全体では「自己評価が低い」(58%)、「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」(49%)、「人との距離が適切でない」(45%)、「大人に適切に頼ることができない」(36%)、「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」(35%)、「職員に対する反抗、暴力がある」(30%)、「人に対する支配性が強くコントロールしようとする」(27%)、「同年齢の友人

と遊べない」（25%）、「他者に従順で影響を受けやすい」（20%）、「性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい」（17%）が高い割合で認められる。これらを見ると、衝動や欲求の制御の難しさ、適切な対人関係が結べないこと、大人との適切な依存関係の結べなさ、対人関係が支配か服従かの両極に偏りやすいなど、自他の境界感覚の未熟さ、自己評価の低さ、共感性のなさなど、心的発達の未熟さと対人関係の課題を抱えていることが明らかになった。これらは性的問題に対する抑止力の脆弱さと関係する。また特に衝動コントロールの悪さ、性的刺激への抵抗感のなさ、他者への従順さといった傾向は加害被害発生に結びつきやすい問題と言えよう。

②男女差、年代差

これらの課題を抱えた子どもの率については、男女間ではほぼ同様の傾向を示すが、年齢群によってその様相は異なる。

（ア）男子

男子では「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」「人に対する支配性が強くコントロールしようとする」は中学校層ではその率が低くなる。これは中学生には一定の治療を受け改善された子どもが多いことが要因の一つとして推定されよう。これらは性的問題の防止力として見た場合、重要な改善点である。とはいえ、こうした問題を抱えたまま中学年齢にいる子どもも 2 割以上存在し、施設全体を考えた場合、小学校高学年や中学生が中心となって加害の問題に至る可能性は充分に抱えていると認識すべきであろう。また「大人に適切に頼ることができない」子どもも中学生年齢群で上昇している。思春期に至り、職員と距離を置くことは自然な流れともいえるが、一方で子ども同士は不適切な関係性を促進させやすいともいえる。

（イ）女子

女子では、男子同様に「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」「暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い」「人に対する支配性が強くコントロールしようとする」は年齢が上がるにつれてその率は低くなる。また「相手の立場で感じたり考えたり出来ない」「職員に対する反抗、暴力がある」も低くなる。しかし低いとはいえ男子と同様、これらの問題を持つ子どもは 2 割以上存在する。また「自傷がある」が急増し 3 割以上を占めている。性的被害や加害の問題から身を守るための充分な力がついていない状況である子ども達が男女ともに少なくないことが分かる。

（２）性的被害

過去の性被害体験については、「過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）」および「過去に非接触型性的虐待を受けている」子どもは、両項目とも全体の9%を占めていた。こうした児童は小学校低学年から存在し、小学校低学年層の男子で「過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外からのものを含む）」は男子で 6%、女子で 16%であり、「過去に非接触型性的虐待を受けている」子どもは男児 12%、女子で 21%であった。性的被害を受けた子どもが一定程度おり、こうした子ども達の後遺症としての性化行動が性的問題の引き金になりやすいことは充分に考えられる。性的被害体験のある子どもは今後増加すると思われる。その分問題発生のリスクは高まると言えるだろう。

３．施設内で起きた性的加害問題

これまで施設内で起きる性的加害を調査した研究はなかった。今回の調査で過去 3 年間での性的加害の実態を調査したところ、27 施設（73%）で性的加害の問題が生じていることが分かった。加害をおこした子どもの人数は、最大で 11 人、最小で 1 人であった。一人の子どもの問題から連鎖していく状況が指摘されており（海野他，2007）、独立した問題が複数回と言うよりも、つながり合った一連の問題として生じている施設が多いと思われる。しかしこの点については今回の調査では明確とはならず、事例検討やヒアリングを通して、問題が派生した経緯やその後の連鎖について明らかにしていくことが必要であろう。

性的問題に至った子どもを措置変更して対応した施設は18%であり、77%は施設内に子どもを残し、改善に向けた対応をしていた。この数値には、問題を起こした児童の措置変更がしにくいという事情が反映されている。加害行為を行った児童と生活の場を共にし続けることは、被害を受けた児童にとっては被害体験を思い出したり、恐怖を感じ続けることになるなど好ましいことではない。一方、措置変更が可能な場合でも、当該児童の養育環境が変わってしまうことも好ましいとは言えない面もある。このように性的問題発生後の措置変更は割り切りの難しい問題もはらんでいる。

しかし、性的な逸脱行動をした児童でも措置変更せずに改善した例が少なくないということ(75%)は、措置変更しなくても何らかの手立てを行うことで、改善の道をつくる可能性のあることを示唆している。今後、この点についてはさらなる検討を深める必要がある。ただし、措置変更せずに、何らかの手立てを行っていながら問題が改善せずにいる児童がいる(25%)。これについても検討を深める必要がある。

４．性的問題行動に対応するための取り組み

児童福祉施設は性的加害や被害に至るリスクを抱えた子どもたちが一定以上入所している施設ゆえに、こうした問題が発生する可能性は極めて高いことをまず認識する必要がある。その上で予防的な取り組みをいかに充実させるかが重要となる。

まず第1に施設内治療構造が予防的に機能していることである。先述したように性的問題に通じてしまう多くのリスクを抱えた子ども達に対して、物理的な境界設定や大人の目が届く環境設定は重要である。また自他の境界感覚は他者への性的侵害を抑止し、他者からの性的侵害を防ぐ感覚として重要であると指摘されている。これに関して、男女の居住空間、個人スペースと共有スペースの使い分け等、環境上の配慮をしている施設が3分の2以上であった。しかし所有物については、共有物を少なくし、自分の物をしっかりと守れるような配慮を意識している施設が4割にとどまっていた。自分の所有物が大切に守られることは、自分が大切に守られる感覚と密接に関係し、他者からの侵襲的な行為への防止につながる。施設は共有物が多くなる傾向があり、こうした点は課題と言えよう。また死角がなくなるような工夫を行っている施設は46%にとどまっていた。

予防的取組として個々の子どもに性教育をおこなっている施設は62%、グループで行っている施設は3分の1であった。性被害体験を持つ子どもや発達上の問題を抱える子どもが多く、一般の性教育をそのまま施設で実施することの難しさがあるが、入所児童に適した性教育とはどのようなものかをさらに検討し、適切に実施することが課題と言えよう。

性被害が起きている場合は早期に気づく必要がある。そのために入所にあたってのアセスメントが重要との指摘は多い。入所にあたって、その子どもが性的加害を行う危険性あるいは被害を受け

やすい傾向についてアセスメントを十分に行うことで、行動を予測し、危険回避に向けた対応を検討する必要がある。また被害児が職員にきちんと訴えることが重要で、6割の施設がその点を重視していた。具体的には、信頼関係の構築、ＣＡＰなどのプログラムの実施、外部の第三者が聴き取りを行うことなどがあげられている。

性被害を受けた子どもに対して、特別な取り組みや重視していることがある施設は約半数である。具体的には個別セラピー、アサーション等の心理教育、ＣＡＰ、性教育、フラッシュバックへの対応、不眠や悪夢への対応などがあげられている。性の問題を抱えている子どもの場合、解離や感覚の鈍麻等の問題を抱えている場合も少なくない。身体感覚の統合と、それをベースとした安心感や安全感を抱けるような工夫をしている施設が４分の１強あり、具体的にはリラクゼーション、動作法、マッサージ、アロマテラピーなどがあげられていた。

施設内だけでは十分に対応できないケースも少なくなく、児童相談所を中心とした関係機関との協働が不可欠である。児童相談所に期待することとして、緊急時の一時保護、事実確認のための面接等があげられていた。

しかしこの問題に対する認識や取り組みの現状は、施設間で差があり、取り立てて検討していない施設も見られる。しかし、子どもの状況を見れば、発生につながる様々な問題を抱えている状況であることは明白である。施設内で性的問題が起こる可能性は非常に高いことを認識することが重要と思われる。

５．今後の課題

今回の調査では、性的な問題、及びその他の問題を抱えた子どもがどの程度存在するかを調べたため、個人の中でこれらの問題各項目がどの程度該当するか、あるいはそれぞれの問題がどのように関係しあっているかについては明確にならなかった。上述したように、特に深刻な問題である性的加害被害について、その発生機序や連鎖による問題の拡大の諸相についても、今回の調査では把握できていない。また性的問題の対応に必要と思われる取組みの現状を調べたが、性的問題を持つ個々の子どもの問題に即してどのような具体的対応を行ったかについても充分に捉えるには至っていない。今後は性的加害に至ったケースを具体的に取り上げて、その要因の整理を行うとともに、被害が拡大するメカニズム、それらに対する取り組みの現状と課題等を整理し、施設内の性的問題の理解と適切な対応のあり方について検討を深めることが必要である。今後の研究と第2報告ではそれらについて扱う予定である。

Ⅴ　文献

Friedrich,W.N.(1991) CSBI(Child Sexual Behavior Inventory)

星野崇啓(2009) 施設内虐待後の再建と予防　子どもの虐待とネグレクト 11(2),182-193

海野千畝子・杉山登志郎（2007）性的虐待の治療に関する研究　その２児童養護施設の施設内性的虐待への対応　小児の精神と神経,Vol47(4),263-272

柳沢他（2009，2010，2010）子どもへの性的虐待の予防・対応・ケアに関する研究　厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業　平成 20 年・21 年・22 年度総合研究報告書

資料　調査用質問紙

◎以下 Q1 及び Q2 の質問に対して、年代別 **（今回は小学生低学年、小学生高学年、中学生）**、男女別に人数をお答えください。**当該年齢がいない場合、上段にある「該当年齢児　なし」に〇をつけ**、各質問には回答しないで下さい。なお、本調査は、特記ない限り、現在在籍児童の過去半年間の施設内の状況についてご回答下さい。

小学生低学年（1～3 年）　**該当年齢児なし　→　（男・女・両方）**

Q 1　性的行動について

1．人にベタベタする、会話の際に相手の身体に触る	男（　　）人　女（　　）人
2．異性のような服装をする	男（　　）人　女（　　）人
3．人前で性器を触ったり、マスターベーションする	男（　　）人　女（　　）人
4．性器を描いたり、作ったりする	男（　　）人　女（　　）人
5．他人の性器やプライベートゾーンに触る	男（　　）人　女（　　）人
6．卑猥な言葉、性行為に関する声を出す	男（　　）人　女（　　）人
7．性器やプライベートゾーンを他人に見せる	男（　　）人　女（　　）人
8．性行為について話す	男（　　）人　女（　　）人
9．異性に過剰に興味を示したり、過度に親しくする	男（　　）人　女（　　）人
10．ボランティアや実習生などよく知らない大人に抱きつく	男（　　）人　女（　　）人
11．性行為について、場をわきまえず、知りたがる	男（　　）人　女（　　）人
12．Hごっこや変態ごっこなど性的な遊びをする	男（　　）人　女（　　）人
13．ＴＶや本での性描写を見て、過度に反応する	男（　　）人　女（　　）人
14．アダルトサイトやポルノ写真を所有する	男（　　）人　女（　　）人
15．施設内の子ども（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ（施設内恋愛・合意による）	男（　　）人　女（　　）人
16．施設外の子ども（同世代）とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ（施設外恋愛・合意による）	男（　　）人　女（　　）人
17．施設外の成人とキスをしたり身体に触るなど性的接触を持つ（例）：施設外恋愛　援助交際、出会い系など	男（　　）人　女（　　）人
18．異性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する。	男（　　）人　女（　　）人
19．同性にキスをしたり身体を触る、触らせるなど性的接触を強要する	男（　　）人　女（　　）人
20．接触を伴わない性的な嫌がらせ・脅しをする（例）：性的な写真を携帯で送る	男（　　）人　女（　　）人
21．性的目的で下着を盗んだり、買い集めたりする	男（　　）人　女（　　）人
22．異性の居室へ侵入をする	男（　　）人　女（　　）人

Q 2　以下のような子どもがどのくらいいますか

1．人との距離が適切でない	男（　　）人　女（　　）人
2．同年齢の友人と遊べない	男（　　）人　女（　　）人
3．相手の立場で感じたり考えたり出来ない	男（　　）人　女（　　）人
4．自己評価が低い	男（　　）人　女（　　）人

5．遺糞など排尿排泄に関する逸脱行為がある　男（　　）人　女（　　）人

6．性的接触に抵抗感がなく、誘惑に乗りやすい　男（　　）人　女（　　）人

7．人に対する支配性が強く、コントロールしようとする　男（　　）人　女（　　）人

8．暴言暴力に至るなど衝動性のコントロールが悪い　男（　　）人　女（　　）人

9．過去に接触型性的虐待を受けている（養育者以外も含む）

（例）：近隣住民からの性的いたずらなども含む　男（　　）人　女（　　）人

10．過去に非接触型性的虐待を受けている （例)性交渉の目撃や性的刺激への暴露など　男（　　）人　女（　　）人

11．異性の靴を集めるなど性的倒錯行為をする　男（　　）人　女（　　）人

12．ボーっとすることがある、振り返りが出来ない（解離症状）　男（　　）人　女（　　）人

13．大人に適切に頼ることが出来ない　男（　　）人　女（　　）人

14．自分の性を受け入れられない　男（　　）人　女（　　）人

15．基本的な生活習慣が身についていない　男（　　）人　女（　　）人

16．他者に従順で影響を受けやすい　男（　　）人　女（　　）人

17．自傷がある　男（　　）人　女（　　）人

18．喫煙、万引き等の非行傾向がある　男（　　）人　女（　　）人

19．職員に対する反抗、暴力がある　男（　　）人　女（　　）人

小学生高学年（4～6 年）　**該当年齢児なし　→　（男・女・両方）**

（同質問）

中学生　**該当年齢児なし　→　（男・女・両方）**

（同質問）

Ｑ３　貴施設の援助状況についてお聞かせ下さい。

該当する場合は「はい」を、該当しない場合は「いいえ」を、該当するが明確でない場合は「どちらでもない」を選択ください。

1．個人のスペースや所有物が他人から侵されず、守られている　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

2．個人スペースと共有スペースの使い分けに配慮した指導をしている　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

例：パジャマで共有スペースに出てはいけないなど

3．男女の居住空間が構造的に分かれている　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

例：ドアの施錠・階段や出入り口のセンサーなど

4．男女の居住空間がルールで守られている　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

例：男女の居室の行き来を禁止しているなど

5．必要に応じて、入浴が個別に利用できる　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

6．必要に応じて、トイレが個別に利用できる　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

7．死角が少なくなるような工夫をしている　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

8．ルールが明確に決められ、生活の手引きなどが用意されている　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

9．職員間でルールが共有され、大きくズレて混乱することはない　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

１０．ポルノ（雑誌やＤＶＤなど）の持ち込みを禁止している　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

１１．施設内の男女交際を禁止している　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

１２．施設外の男女交際を禁止している　1．いいえ　2．どちらでもない　3．はい

１３．グループで性教育を実施している　　1．いいえ　　2．どちらでもない　3．はい

どのようなものですか？

１４．個別で性教育を実施している　　1．いいえ　　2．どちらでもない　3．はい

どのようなものですか？

１５．（入所前の、過去の）潜在的な性被害に気づくための取り組みや重視していることはありますか

1．いいえ　　2．どちらでもない　3．はい

どのようなものですか？

１６．施設内で、被害を受けた子どもが訴えやすいような取り組みや重視していることはありますか

1．いいえ　　2．どちらでもない　3．はい

どのようなものですか？

１７．からだの感覚を通して子どもに安心感や安全感を与える・伝える工夫をしていますか

例）個人・グループの場面で、深呼吸、リラクゼーションのワークを取り入れている。

1．いいえ　　2．どちらでもない　3．はい

どのようなものですか？

１８．同世代の仲間作りのための取り組みや重視していることはありますか

1．いいえ　　2．どちらでもない　3．はい

どのようなものですか？

１９．性的被害を受けた子どもに対して、取り組みや重視していることはありますか

1．いいえ　　2．どちらでもない　3．はい

どのようなものですか？

２０．過去３年間（19 年度～21 年度）に、性的加害をした子どもはいましたか　　1．いいえ　　2．はい

過去３年間（　　）人

２０－２．その内、性的加害を理由に措置変更した子どもは何人いましたか　　（　　）人

２０－３．措置変更となった判断基準はどのようなものでしたか

２０－４．その内、措置変更しなかった子どもは何人いましたか　（　　）人

２０－５．措置変更しなかった判断基準はどのようなものでしたか

２０－６．措置変更しなかった子どものうち、改善がみられた子どもは何人いましたか　（　　）人

２０－７．改善がみられた子どもにはどのような援助をしましたか？また、なぜ改善につながったと思いますか

２１．性的問題に関連して、児童相談所に期待することは何ですか

平成21・22年度研究報告書
情緒障害児短期治療施設における
性的問題への対応に関する研究
（第１報）

平成24年3月1日発行

発　行　社会福祉法人 横浜博萌会
子どもの虹情報研修センター
（日本虐待・思春期問題情報研修センター）
編　集　子どもの虹情報研修センター
〒245-0062　横浜市戸塚区汲沢町983番地
TEL. 045－871－8011　FAX. 045－871－8091
mail : info@crc-japan.net
URL : http://www.crc-japan.net
編　集　研究代表者　滝川　一廣
共同研究者　平田　美音
玉井　邦夫
坂口　繁治
平岡　篤武
増沢　　高
奥山　志麻
大塚　　斉
相澤林太郎
堀　　健一
印　刷　㈱柏苑社　　TEL.045－711－5600(代)